

静岡県立大学短期大学部

研究紀要 18 - W号 (2004 年度) - 10

青年期における女性の自己形成

三 田 英 二

Women's Self-Formation in Adolescence

MITA Eiji

<目次>

序論	・・・	3 頁
研究 1	重視される自己の側面の測定方法について	・・・ 13 頁
研究 2	Self-Esteem の自己認知的側面の検討 (1)	
	性格特性との関係	・・・ 19 頁
研究 3	Self-Esteem の自己認知的側面の検討 (2)	
	SEI-B を用いて, 性格特性との関係	・・・ 28 頁
研究 4	自己認知に影響を与える要因の検討 (1)	
	- 性格特性からの検討 -	・・・ 38 頁
研究 5	自己認知に影響を与える要因の検討 (2)	
	self-esteem からの検討	・・・ 43 頁
研究 6	自己認知に影響を与える要因の検討 (3)	
	親のしつけの型からの検討	・・・ 48 頁
研究 7	独立意識からみた青年期女子の自己の構造	・・・ 56 頁
研究 8	青年期から成人期前期にかけての Self-Esteem の発達的变化に関する一研究	
	- 女子を被験者として, 性格特性からの検討 -	・・・ 65 頁
総括的討論	・・・	68 頁

序 論

本研究は、青年期女子の自己の構造と自己認知の特徴を明らかにし、その上で女性の青年期での自己形成について検討することが目的である。

自己の発達や構造に関しては、自己概念、自己認知、自己受容など用語の相違はあっても、何らかの形で性差があると指摘されている。

しかし、従来の自己形成理論は男性中心に構築されてきたもので、女性の発達過程に適合しない(高橋・柏木, 1995) 特に Erikson の自我同一性理論は女性になじまない(山本, 1988; 桑原, 1990; 三枚, 1998) といわれ、自我同一性は「他者との関係性」からとらえ直すべき(杉村, 1998) とも指摘されている。また、このような指摘があるためか、女性の同一性形成に不明な点が多いとし、男性にのみ焦点を当て同一性形成について検討した研究も見られる(石谷, 1994)。

これらのことについて、柏木(1994)は、性役割の発達過程の中に女性固有の問題が生じることを指摘している。齋藤(1990)は柏木の研究(1973,1989)を取り上げ、「柏木は女子青年における「性役割観」と自己の確立の問題をまとめて論じながら...男性特徴に比し女性特徴に対する社会一般の評価が低いという両者にあたえられる価値の差が、葛藤の收拾を困難にしたり、女性の自己価値(self-esteem)や自信(self-reliance)を低下させることにもつながることを実証的資料によって検討している。確かに、セルフ・エスティームと性度尺度に関する各種の研究で、女子青年の場合も男性尺度のスコアの高さがセルフ・エスティームの高さと関係することは、すでに一般的な結果として認められている。」(p.165)と述べている。

確かに、性役割の観点から、Marcia, J.E. (1966)が開発した同一性地位に関して検討した研究では、女性の同一性地位を有意に区別するのは、女性性尺度ではなく男性性尺度であった(Orlofsky, J.L., 1977; Prajer, K.J., 1983)。また、青年期から成人期にかけての self-esteem に関して、男性は上昇させるが女性は下降し、その要因として社会的な性役割の相違が示唆(Block, J., & Robins, R.W., 1993)されている。

社会的な状況が“本来”の女性の自己形成と不都合を起こしているのかもしれない。このためか、自己形成を発達の観点から検討した研究では、男性は直線的な発達過程をたどるが、女性は複雑な発達過程を示す(田端, 1980; 伊藤, 1992a)という指摘もある。

三田(1984)は、self-esteem を「個人が主観的に重要だとする自己の側面に対する自己評価」としてとらえ、高校生・大学生を調査対象者とし、自己認知的側面と自己評価的側面から青年期の self-esteem の発達の变化について検討を行った。男性で、重要だとする自己の側面が、高校生では、自己の外面的な側面であり、大学生では内面的な自己の側面が重要視されていた。しかし、女性の場合、高校生・大学生間で自己の各側面への重視度に差異はなく、発達の变化が見られなかった。自己評価的側面でも、自己評価得点の平均値で男性では、高校生 > 大学生という有意差が見られたのに対し、女性では高校生・大学生間で自己評価得点上の差異はみられなかった。自己形成上の性差を示唆する結果であった。

三田(1986)は、この結果を受け、高校生・大学生別の性差について検討を行った。自己認知的側面で、高校生では、内面的で否定的な自己の側面への重視度が女性の方が高く、

その他の側面では差異はみられなかった。大学生では、自己の外面的で否定的な側面（他者からの評価が気になるといった側面）で、女性の方が重視度が高いという有意傾向がみられた。自己評価的側面では、相対的に男性の方が女性より自己評価得点が高い結果が得られた。

これらのことから、男性は、高校生から大学生にかけ、自己認知的側面で、外面的な自己の側面への重視から内面的な自己の側面への重視というように重視する自己の側面が発達的に移行し、同時に self-esteem が低下していくという、自己の再構成を思わせる、従来より指摘されている発達の方向性がみてとれる。しかし、女性の場合、一貫して自己の否定的な側面を重視しているというだけで、一定の発達の方向性を見定めることができない。

このように、性により自己の発達や構造が異なってしまうことや、“複雑”ということさらさら考えれば、それは、女性の青年期での自己形成が、それまでの理論に合致しないため“複雑”としか言い表せなかったこと、また、男性が“直線的”と比喻されるのは、理論になじむ尺度が用いられた結果とも推測され、確かに前述の「男性中心に構築された自己形成理論」という指摘も当を得たものといえよう。女性の自己の構造や発達の様相の“複雑”さを解明する、あるいは、女性に当てはまらない理論というのであれば、女性の自己形成について、さらなる検討を加えていく必要がある。

自己に関する研究は、特に自己への現象学的接近が唱えられて以来、数多くの研究が行われてきている。初期の研究として、Bills,R.E.,Vance,E.L.& MacLearn,O.(1951)は「理想自己」と「現実自己」の差異を測定し、その差異が大きいと内的不適応状態になることを見いだした。

Q分類を用いて、心理治療の効果を検討した研究（Dymond,R.F.,1957）では、治療前に自己の否定的側面と肯定的側面や理想自己と現実自己を測定し、治療後に自己をどの程度肯定的に評価できるようになったか、また、理想自己と現実自己との一致度がどの程度高まったかなど検討されている。

このように、「自己」への現象学的接近が提唱された当時の初期の研究は、自己概念や自己受容と適応の問題を取り扱うことが多く、「自己」の内容にまで言及されなかった。

しかし、「自己」に関する心理学的な研究の原点といわれる James,W.(1896/1992)は、全自我の二重性について論じ、主我（I）と客我（Me）に分け、さらに認識の対象となる客我（自己）を「物質的客我」・「社会的客我」・「精神的客我」から構成されるとした。比較的新しいところでは、Pope,A.W.,McHale S.M. & Craighead W.E.(1988/1992)は、自己概念（self-concept）に含まれる情報を評価することを自尊心（self-esteem）とし、臨床的な観点から、自尊心は「社会的」、「学業的」、「家族的」、「身体的」、「全体的領域」からなると述べている。ただ、これら研究は、自己の内容や、自己のどの側面がどのようなときに内的準拠枠として機能するかまでは言及されていなかった。

因子分析法の発展に伴い、James(1896/1992)や Popeら(1988/1992)のように、思弁的に「自己」の内容を分類するのではなく、統計的に「自己」の内容を分析することができるようになった。

たとえば、Janis,I.L.,and Field,P.B.が作成した23項目からなる自己不全感尺度（Feeling of Inadequacy Scale^{注1}）に5項目を加え因子分析を行った Fleming,J.S, & Courtney,B.E.（1984）

は、3因子を抽出している。第1因子は"Social Confidence"、第2因子"Self-Evaluation of Scholastic Abilities"、第3因子"Self-Regard"と命名されている。

また、山本・松井・山成(1982)は、自己認知の構造として、因子分析法により11の因子(第1因子「社交」、第2因子「スポーツ能力」、第3因子「知性」、第4因子「優しさ」、第5因子「性」、第6因子「容貌」、第7因子「生き方」、第8因子「経済力」、第9因子「趣味や特技」、第10因子「まじめさ」、第11因子「学校の評判」)を抽出した。そして、「男子では内面的な資質が自己の重要な側面であり、女子では対人的な側面や社会的属性が重要なものになっている。」と自己認知における性差を指摘している。

また、平石(1990)は、高校生・大学生の男女を対象に、「対自己-対他者」・「健康-不健康」の軸から自己意識をとらえ、自己意識の内容を検討した。その結果、「健康-対他者」の領域では、「自己表明・対人積極性」・「異性・友人関係」・「他者受容」、 「健康-対自己」の領域では、「自己実現的態度」・「充実感」・「自己受容・自己信頼感」、 「不健康-対他者」の領域では、「内閉性・人間不信」・「視線恐怖傾向・対人緊張」・「否定的家族感情」、 「不健康-対自己」の領域では、「目標喪失感・空虚感」・「不決断・自己不信感」・「衝動性・非現実感」と関連することをそれぞれ見いだしている。

山本ら(1982)の研究は、自己の各側面に対する重要度も検討しているが、これら研究は、何故その自己の側面を重要視するのかまでは検討されていなかった。平石(1990)の研究は、自己の構造は重層的なものとしながらも、「自己」をとらえる視点として、「対自己-対他者」・「健康-不健康」の軸から自己意識をとらえ、各側面での内容について検討したところが新しい観点であった。しかし、これも山本ら(1984)同様、自己の各側面の意識内容がどのような機能を持っているかまでは言及されていない。自己概念が内的準拠枠としての機能を持つのであれば、どの側面がどのように機能しているのか、明らかにしていく必要がある。

平石(1990)が述べているように、自己の構造の重層性を指摘した研究(Shavelson,R.J.,Hubner,J.J.,&Stanton,G.C.,1976,Song,I.S.,&Hattie,J.,1984, Marsh,H.W.,&Shavelson,R.J.,1985)もあるが、本研究では、自己をとらえる視点として平石(1990)と同様の立場をとっていくことを考えている。

自己の構造をとらえる視点として、梶田(1988)は、「少しでも人からよく見られたい」、あるいは「人のうわさが気になる」といった他者のまなざしとの関係における自己評価的意識の領域(他者のまなざしへの意識を中心とした領域)と、「自分に自信をもっている」とか「自分がいやになる」といった自分自身のまなざしのもとにおける自己評価的意識(自己へのまなざしを中心とした領域)があることを指摘している。また、Gilligan,C.(1982/1986)は、他者関係にかかわる自己の側面を connected-self とし、他者関係から分離した自己の側面を separated-self とした。

このように自己をとらえる視点として、梶田(1988)の「他者のまなざしへの意識を中心とした領域」、Gilligan(1982/1986)の「connected-self」といった対人関係領域や社交場面、社会的属性などを表す自己の外面的側面と、「自己へのまなざしを中心とした領域」や「separated-self」といった内省や自己洞察による自己認知の領域などを表す自己の内面的側面というように、自己の領域・側面を分けて考えることができる。

また、遠藤(1992ab)は、自己評価基準としての「理想自己」を肯定的な側面と否定的

な側面に分ける必要性について論じ、前述の平石（1990）は心理学的健康の観点から自己意識の肯定的側面と否定的側面について論じている。

このような指摘から、自己を「外面的 - 内面的」・「肯定的 - 否定的」という軸から「外面的で肯定的な自己の側面」・「外面的で否定的な自己の側面」・「内面的で肯定的な自己の側面」・「内面的で否定的な自己の側面」というように4つの側面・領域からとらえていきたいと考えている。

また、Furlong, A., & Laforge, H. (1975) は、「理想自己」は社会的望ましさというステレオタイプが影響するとし、MAS (Manifest Anxiety Scale: 顕在性不安尺度) を用いて検討した結果、MAS には「理想自己」よりも、「理想自己」と「現実自己」との差異得点が影響し、その差異得点も多くの部分で「現実自己」得点に関係していることを見いだした。また、同様に菅 (1975) も、対他者関係の指標として、「理想自己」と「現実自己」との差異得点よりも「現実自己」得点の方が妥当性が高いという結論を得た。現在でも、様々な自己を想定し、現実自己との差異得点との検討が行われている（例えば、遠藤、1992ab；伊藤、1992b；水間、1998 など）が、本研究では、Furlong と Laforge (1975) や菅 (1975) の指摘を受け、「現実自己」の測定だけで検討を行っていく。

ところで、自己概念や self-esteem を測定する際、法則定立的な測定方法と個性記述的な測定方法が考えられる。法則定立的な測定方法では、量的な統計処理・分析を行うことが容易になる。しかし、調査項目を調査者自身が用意するため、調査対象者にとり全く重要とされない自己の側面の調査項目が含まれる可能性もある。Who are you test (Bugental, J.F.T., & Zelen, S.L., 1950) や 20 答法 (Kuhn, M.H., & McPartland, T.S., 1954) に代表されるような個性記述的な測定方法であれば、個人の特徴をとらえるのには有効になる。しかし、その分析方法が必ずしも確立されているとは言い切れないし、また、量的な統計処理・分析を行うことに困難さが伴うといわざるを得ない。

特に、self-esteem を測定する際、self-esteem が自己概念の一側面であり (Epstein, S., 1973；Shavelson, R. J., & Bolus, R., 1982) 自己概念に伴なうところの価値的側面 (菅、1975) 個人が自分自身に対して持つ個人的な価値的判断 (Coopersmith, S., 1967) といわれ、Jacobson, E. (1964/1981) が「自己価値 (self-esteem) は自己評価 (self-evaluation) の観念的表現、とりわけ情緒的表現である。」(p.124) と述べたように、単なる自己評価からも区別されなければならない。

Rokeach, M. (1960, 1968) は、認知システムを、個人が真実として受容できる信念 (belief) と、虚偽として否定する非信念 (disbelief) とに分けられるとし、それらは相互に関連しあい、階層的構造をなして、一つのシステムを構成していると考えた。この信念はすべてが同等に重みづけられているわけではなく、「中心的領域」、「媒介的領域」、「周辺の領域」の三つの領域に分類している。そして、この「中心的領域」は、変化することに抵抗が大きく、「周辺の領域」は、変化しやすいとされる。また、「中心的領域」は他の領域により大きな影響を与えている。

Tesser, A. (1984) が提唱した自己評価維持 (self-evaluation maintenance ; SEM) モデルは、人は基本的に自分を肯定的に評価しようとする動機を持っているという前提に基づいている。そして友人など自分に心理的に近い個人が修めた優秀な業績を我がことのように喜ぶことを「反映過程」とし、逆に、友人が修めた優秀な業績に嫉妬したり悔しがったりする

ことを同様に「比較過程」とした。友人が上げた業績の分野に対する自分自身の重み付けがあまりない場合「反映過程」が生起し、逆に自分自身の重み付けが強い場合「比較過程」が生起するとした。すなわち、友人があげた業績が自分自身を規定する自己の領域と類似するか否かであり、これを「関与度」とした。

Rokeach, M. (1960, 1968) の「中心的領域」や Tesser, A. (1984) の SEM モデルにおける「関与度」は、三田 (1984) の self-esteem の定義「個人が主観的に重要だとする自己の側面に対する自己評価」の「個人が主観的に重要だとする自己の側面」に対応する。

近年、法則定立的な測定方法の中に個性記述的な測定方法をいかに取り入れていくか、その方法論について検討が加えられている (遠藤、1992b; 溝上、1997; 水間、1998)。例えば、遠藤 (1992b) は、調査者側が事前調査の上用意した肯定的・否定的項目各 25 項目の重要と思われる自己の側面に対し、調査対象者に 5 件法により回答を求め、評定値 5 を付けた項目を調査対象者個人にとっての重要な項目と見なし検討を行った。その結果、調査対象者にとり重要な項目と見なされた項目での得点の方がそれ以外の項目での得点よりも自尊感情と強いかわりがあることを見いだしている。

従来 of self-esteem の測定方法は、多くの場合、法則定立的な測定方法で単なる自己評価も含まれていた可能性が高いものと推測される。溝上 (1999) は、「…self-esteem の場合も、self-evaluation とは字義上微妙に違うわけである。しかし、測定ということになると、ともに自身の感情のあり方を対象化して評価を求めることになるから、結果的には「自己評価 (self-evaluation)」として同義となる。」(p.22) と指摘している。このような事情があるため、個性記述的な測定方法の必要性を感じる研究者が多くなってきたものと思われる。

Rokeach, M. (1960, 1968) や Tesser, A. (1984) の指摘も鑑み、個人の self-esteem を考えた場合、問題となるのは、総体的な self-esteem よりも、個人的な意味合いが強い自己の側面での自己評価と考える。個人的な意味合いのない自己の側面での評価は単なる自己評価で self-esteem とは考えにくい。言い換えれば、個人が重要とする自己の側面がどこに置かれるかがまず問題となり、その側面における自己評価の高低が個人の self-esteem を決定するものと考えている。このため self-esteem は、一次的には自己認知的側面の問題で、自己評価的側面は二次的な問題と考えられる。

このような意味において、調査者自身が用意した項目でも、調査対象者個人が重要と考えるか否かの回答をまず求め、その上でその項目における自己評価を測定することで、ある程度、法則定立的な測定方法の中にも、個性記述的な測定方法を取り入れられる可能性も出てくるのではないかと考えている。換言すれば、単なる知覚される自己 (自己概念) を測定するより、self-esteem の自己認知的側面のどの領域を重視しているかを測定することで、調査対象者の内的準拠枠ともなり得る、より重要な自己の側面を検討できるものと思われる。そして、このような測定方法であれば統計的な処理も容易になる。

本研究では、このような観点から、特に“複雑”といわれる女性の自己認知の様式に注目し、女子青年の重視される自己の側面 (self-esteem の自己認知的側面) を「外面的 - 内面的」・「肯定的 - 否定的」の次元でとらえ検討を行っていく。

これまで、女子青年の自己認知の特徴として、自己の外面的で否定的な側面を重視していることが指摘されている (山本・松井・山成、1982; 三田、1984, 1986)。しかし、

Erikson, E.H. (1959/1973) は、「自我同一性に伴う自己評価 (self-esteem) は、自分の心身を働かせる機能的なよるこびと実際の行為との漸進的な一致を保証するような自我理想と社会的役割に由来する熟達と社会的役割にその基礎をおいている。」(p.34) と述べている。この self-esteem とは、自己の肯定的な側面を指しているものと考えられる。しかし、前述のように女子青年の自己認知の特徴として、自己の外面的で否定的な側面が重要な役割を演じていることが示唆される。Erikson の自我同一性理論は、女性の発達になじまないという指摘 (山本, 1988; 桑原, 1990; 三枚, 1998) もあるが、このような女子青年の自己認知の特徴が、どのような要因から形成されてきているか検討していく必要がある。

自己の発達は、重要な他者 (significant others) との相互作用に大きく影響される (Epstein, S., 1973)。小高 (1998) は、青年期の対人関係は、一般的には友人関係や異性関係に重点が置かれるが、その基底には親子関係が継続し、青年にとって重要な意味を持つと述べている。また、日米の青年の親子関係を独立意識から比較検討を行った小野寺 (1993) は、日本の男女は米国の男女よりも、親を統制的に評価する傾向があることを報告している。このことは、小高 (1998) が指摘するように、青年期においても親を重要な他者として認知しているからこそ、青年は主観的に親の統制下に置かれていると感じ、その親から心理的自立を図ろうともがいていることを示すものと考えられる。すなわち、青年期においても、親は自己の発達に影響を与える存在と考えられる。また、このことは、青年が親に対して抱く自立心・独立心と青年期の自己形成の間に因果関係があることを想定させるものでもある。

自己概念形成に関連し、加藤・高木 (1980) は、親からの独立性は自己概念の意欲性・活動性の尺度と相関を持ち、親への依存性は自己概念の几帳面さ・清潔さ・誠実さと相関を持ち、反抗・内的混乱は自己概念の反社会性の尺度と相関を持つことを見いだした。高木・藤田 (1988) は、self-esteem との関連において、「親からの影響」・「親への意識」を説明変数とし、self-esteem を目的変数として重回帰分析を行い、その結果、女子は父からの精神的独立性が高く、父母の心理的圧迫が少ない程自尊感情が高くなることを報告している。

このように、自己形成を考える上で、親との関係を考慮しなければならない。これまでの研究からも、親に対する独立意識など親との関係と青年期の自己形成との間に因果関係が認められる。

梶田 (1980) は、「他者のまなざしへの意識を中心とした領域」と「自己へのまなざしを中心とした領域」は相対的な独立性を保ちながら発達していくことを指摘している。しかし、これまでの親子関係と自己形成に関する研究においては、自己をとらえる視点としての「外面的 - 内面的」・「肯定的 - 否定的」についてまで言及し、詳細に検討されてきていない。

女子青年の自己形成の特徴を検討するためにも、自己の各側面に、親との関係がどのように影響を与えているか、検討していく必要があるものと考えられる。

また、女性の自己の発達や構造は複雑だという指摘がある。このことを検討するためには、親がまだ重要な他者として考えられる青年期段階と、親からの影響が少なくなってきたと想定される青年期の次の段階となる成人期前期を比較することで、女性の自己の発達や構造について、さらに明確なかたちで検討できるものと考えられる。

本研究は、これまで述べてきた理由から女性の自己形成について検討していくものである。単なる知覚される自己の側面を測定し検討するのではなく、self-esteem の自己認知的側面を測定することから女性の自己形成を検討していく。

このためまず、研究1では、self-esteem の自己認知的側面を測定することが有効なことをまず確認していく。

研究2で、self-esteem の自己認知的側面の4つの側面を YG 性格検査を用い、相関分析により自己の各側面の特徴を明らかにしていく。

研究3では、三田(1984)が行った SEI-B(後述)の因子分析で抽出された6因子の特徴を同様に YG 性格検査を用い、相関分析により明らかにしていく。

研究4では、研究3で行った相関分析ではなく、重回帰分析により、説明変数を性格特性とし、self-esteem の自己認知的側面にどのような影響を与えているか因果関係を探っていく。

研究5では、研究4と同様のデザインで self-esteem の自己認知的側面の最近接概念と考えられる self-esteem(Rosenberg Self-Esteem 尺度を用いる)を説明変数とし、self-esteem の自己認知的側面にどのような影響を与えているかを検討する。

研究6では、親からの影響という観点から、親の養育態度を取り上げ、性別しつけが青年期女子の自己認知の様式にどのような影響を与えているかを検討していく。

研究7では、研究6に引き続き、親に対する独立意識を取り上げ、成人期前期段階と比較することから、青年期での自己の構造について検討を行う。self-esteem の自己認知的側面の重視度と、また、独立意識を説明変数として self-esteem の自己認知的側面にどのような影響を与えているか、成人期前期と比較することで青年期の特徴を検討する。

研究8は、補足的な研究となる。総体的な self-esteem を青年期と成人期前期を比較することで発達的な観点から女性の self-esteem について検討していく。

最後に、研究1から8までの結果を踏まえ、総括的な考察を行っていく。

注1 Fleming,J.S, & Courtney,B.E. (1984) は、Janis,I.L.,and Field,P.B. の23項目からなる自己不全感尺度(Feeling of Inadequacy Scale)で想定された自己不全感の低さは高い self-esteem を示すものとして、自己不全感尺度を self-esteem 尺度として用いている。しかし、彼らの論述は、self-esteem と自己概念を明確に区別して用いていないところがある。

<引用文献>

- Bills,R.S.,Vance,E.L.& McLean,O. 1951 An index of adjustment and value. *Journal of Consulting Psychology*. **15**, 257-261 .
- Block,J.,& Robiins,R.W. 1993 A longitudinal study of consistency and change in self-esteem from early adolescence to early adulthood. *Child Development*, **64**, 909-923.
- Bugental,J.F.T., & Zelen,S.L. 1950 Investigation into the self-concept : The W-A-Y(Who are you technique). *Journal of Personality*,**18**,483-498.
- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco :W.H. Freeman.
- Dymond,R.F., 1954 Ajustment changes over therapy from self sorts. 伊東博(訳)1957「自

- 己分類法によって検討した治療による適応の転換」 友田不二男（監訳）ロジャーズ選書5「人格変換の心理」Pp.97-108
- 遠藤辰雄（編）1974 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- 遠藤由美 1992a 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, **63**, 214-217 .
- 遠藤由美 1992b 自己認知と自己評価の関係 - 重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 - 教育心理学研究, **40**, 157-163 .
- Epstein, S. 1973 The self-concept revisited, or a theory of a theory. *American Psychologist*, **28**, 404-416.
- Erikson, E.H. 1959 Identity and life cycle 小此木啓吾（訳編）1973 自我同一性 誠信書房
- Fleming, J.S., & Watts, W.A. 1980 The demerit of self-esteem : some results for a college sample. *Journal of personality and social psychology*, **39**, 921-929
- Furlong, A., & Laforge, H. 1975 Manifest anxiety and self-concept; Further investigations. *The Journal of Genetic Psychology*, **127**, 237-247 .
- Gilligan, C. 1982 *In a different voice: Psychological theory and women's development*. 岩男寿美子（監訳）1986 もうひとつの声 - 男女の道徳 観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造 - 自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康 教育心理学研究, **38**, 320-329 .
- 石谷真一 1994 男子大学生における同一性形成と対人関係性 教育心理学研究, **42**, 118-128.
- 伊藤奈美子 1992a 自己受容と性格特性の関連についての一考察 心理学研究, **63**, 205-208.
- 伊藤奈美子 1992b 自己受容を規定する理想 - 現実の差異と自意識についての研究 教育心理学研究, **40**, 164 - 169 .
- Jacobson, E. 1964 *The self and object world*. 伊藤洸（訳）1981 自己と対象世界：アイデンティティの起源とその展開 岩崎学術出版
- James, W. 1892 *Psychology, briefer course*. 今田寛（訳）1992 心理学（上）岩波文庫
- Janis, I.L., and Field, P.B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In Hovland, C.L. and Janis, I.L., (Eds.) *Personality and Persuasibility*. New Haven: Yale Univ. Press. pp.55-68
- 梶田叡一 1980 自己意識の心理学 東京大学出版
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学（第2版）東京大学出版
- 柏木恵子 1973 現代青年の性役割取得 現代青年心理学講座, **5**, 101-139.
- 柏木恵子 1989 性役割と発達 心理学的視点から 教育と医学, **6**, 31-38. 慶応通信 .
- 柏木恵子 1994 性差の由来 - 発達心理学の立場から - 原ひろ子・大沢真理・丸山真人・山本泰（編）ライブラリー- 関連社会科学 2 ジェンダー 新世社 274-297
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, **28**, 336-340.
- 小高恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究

- 教育心理学研究, **46**, 333-342
- Kuhn, M.H., & McPartland, T.S. 1954 An empirical investigation of self-attitude. *American Sociological Review*, **19**, 68-76.
- 桑原知子 1990 青年期の女性の自己同一性 氏原寛・東山弘子・岡田 康伸 (共編) 現代青年心理学 - 男の立場と女の状況 - 培風館 55-74
- Macia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology* **3**, 551-558.
- Marsh, H.W., & Shavelson, R.J., 1985 Self-Concept: Its multifaceted, Hierarchical structure, *Educational Psychologist*, **20**, 107-123.
- 三枚奈穂 1998 成人女性における自我同一性の感覚について - 相互協調的・相互独立的自己感との関連から - 教育心理学研究, **46**, 229-239.
- 溝上慎一 1997 自己評価の規定要因と SELF-ESTEEM との関係 - 個性 記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係 - 教育心理学研究, **45**, 62-70.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論 実証的心理学のパラダイム 金子書房
- 水間玲子 1998 理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について 教育心理学研究, **46**, 131-141.
- 三田英二 1984 Self-Esteem に関する研究 (1) - 青年期の発達的变化について - 関西学院大学文学部教育学科研究年報, **10**, 29-38.
- 三田英二 1986 Self-Esteem に関する研究 (2) - 青年期の性差について - 臨床教育心理学研究, **12**, 15-21.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, **64**, 147-152.
- Orlofsky, J.L. 1977 Sex-role orientation, identity formation, and self-esteem in college men and women. *Sex Role*, **6**, 561-575.
- Pope, A.W., McHale S.M. & Craighead W.E. 1988 *Self-esteem enhancement with children and adolescents*. Pergamon Press. 高山巖 (監訳) 1992 自尊心の発達と認知行動療法 子どもの自身・自立・自主性をたかめる 岩崎学術出版
- Prajer, K.J. 1983 Identity status, sex-role orientation, and self-esteem in late adolescent females. *The Journal of Genetic Psychology*, **143**, 159-167.
- Rokeach, M. 1960 *The open mind and closed mind*, Basic Books.
- Rokeach, M. 1968 *Briefs, attitudes and values*, Jossey-Bass.
- 齋藤久美子 1990 青年期後期と若い成人期 - 女性を中心に - 小川捷之・齋藤久美子・鑪幹八郎 (編) 「臨床心理学体系 3 - ライフサイクル - 」金子書房 163-176.
- Shavelson, R.J., & Bolus, R. 1982 The self-concept interplay and theory. *Journal of Educational Psychology*. **74**, 3-17.
- Shavelson, R.J., Hubner, J.J., & Stanton, G.C. 1976 The self-concept: validation of construct interpretations. *Review of Educational Research*. **46**, 407-441.
- Song, I.S., & Hattie, J., 1984 Home environment, self-concept, and academic achievement: causal modeling approach. *Journal of Educational Psychology*, **76**, 1269-1281
- 菅佐和子 1975 Self-Esteem と対他者関係に関する一研究 教育心理学研究, **23**,

224-229.

- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 田端純一郎 1980 簡易尺度による自我同一性の研究 - 青年期の性差、女性の特質を中心に - 臨床教育心理学研究, **6**, 12-16.
- 高木秀明・藤田仁美 1988 親子関係と青年の自己意識 - 自我同一性、自尊感情との関連 - 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 360-361
- 高橋恵子・柏木恵子 1995 発達心理学とフェミニズム 柏木恵子・高橋恵子(編著) 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房 1-16
- Tesser,A.(1984)Self-evaluation maintenance model process:Implications for relationships and for development. In J.C.Masters & K.Yarkin-Levin(Eds), *Boundary areas in social and developmental psychology*. Academic Press. Pp271-299
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 山本里花 1988 女子学生の自我同一性に関する研究 - 自我の二指向性の観点から - 教育心理学研究, **36**, 238-248 .

研究 1

重視される自己の側面の測定方法について

．問題

序論で示したように、単なる自己評価と self-esteem の自己認知的側面での評価に違いがあるか否かを検討することが本研究の目的である。

代表的な self-esteem 質問紙 (Janis & Field,1959、Rosenberg,1965、Coopersmith,1967) から内容が重複しないように、また、調査対象者が青年期であるため内容が不適切なものを除き調査項目を選択した。全部で 43 項目となった (表 1 - 1)。

この 43 の質問項目に対し、まず、この質問内容が調査対象者自身にとり「重要である」(気にしている、関心がある)か「重要ではない」かの回答を求める質問紙 (part 1) と、同一の質問に対し「ほとんど思わない」、「たまに思う」、「ときどき思う」、「かなりしばしば思う」、「非常にしばしば思う」の 5 件法により評価をしてもらう質問紙 (part 2) を作成し実施した。

統計的な処理のために part 1 での回答は「重要である」と回答された場合を 1 点、「重要ではない」と回答された場合を 0 点とし、part 2 では「ほとんど思わない」を 1 点、順次 2, 3, 4 点とし「非常にしばしば思う」を 5 点として処理を行った。なお、逆転項目の処理は行っていない。

part 1 で「重要である」と回答された項目での part 2 での得点を、中核的 self-esteem (core self-esteem:CSE) 得点とする。この CSE 得点が self-esteem の自己評価的側面の得点となる。part 1 で「重要ではない」と回答された項目を単なる自己評価得点 (非 CSE 得点) とする。各項目ごと CSE 得点の平均点と非 CSE 得点の平均点の有意差検定を行い、CSE 得点の方が有意に高い得点を示せば、CSE 得点と非 CSE 得点は区別できることになる。これが作業仮説となる。

．方法

1．調査対象者

短大・専門学校に在籍する女子学生 131 名 (平均年齢 18.84、SD=.98、range18-21) を調査対象者とした。

2．用具

「．問題」に記載されている質問紙を作成・使用した (表 1 - 1 参照のこと)。

．結果

各項目ごと part 1 で「重要である」と回答した項目の part 2 での評価得点 (CSE 得点) の平均値と part 1 で「重要ではない」と回答した項目の part 2 での評価得点 (非 CSE 得点) の平均値の差異の有無を確認するため t 検定を行った (表 1 - 1)。この結果項目 1, 12, 39 においてのみ有意差が見られなかった。それ以外の項目ではかなり高い確率での有意差が見られた。

．考察

項目 12 のように、回答に大きな偏りがある項目もあるが、目的は、CSE 得点と非 CSE 得点が区別できるか否かであるため特に調整は行わなかった。

否定的内容・肯定的内容の項目の多くで CSE 得点が非 CSE 得点より有意に高かった。

このことは、CSE と非 CSE は区別できる可能性を示したと考えられる。しかしそれだけでなく、有意に高い得点を示したことは、他の外的変数との相関をとった場合、得点が高い方がより高い相関値を示すことになり、個人にとりより重要な項目として考えられることを示している。このことは、調査対象者個人にとり質問項目の内容が重要な内容（関心がある、個人的意味合いが強いなど）か否かの回答を求めれば、個性記述的な測定方法で出される結果に近い結果が得られる可能性を示唆するものと思われる。作業仮説は支持されたのとも考える。

表 1 - 1 t 検定の結果

		N	平均値	S D	t 値	df	p
01 あなたの知っている大部分の人に比べて自分の方が劣っている	重要である	75	3.0800	1.0750	1.374	126.7	n.s.
	重要ではない	54	2.8519	.8105			
02 私は信頼されている	重要である	117	3.1197	.6968	2.991	127	***
	重要ではない	12	2.5000	.5222			
03 自分が価値のある人間である	重要である	96	3.1250	.8856	2.898	126	***
	重要ではない	32	2.6250	.7071			
04 ときどき自分がてんでダメだと思う	重要である	81	3.9506	.9069	6.025	85.8	****
	重要ではない	48	2.8333	1.0785			
05 自分の知っている人々がいつかあなたを尊敬の眼を持ってあおぎ見る日がある	重要である	17	2.7647	.7524	4.682	127	****
	重要ではない	112	1.7500	.8436			
06 自分で決心することができ、がんばることができる	重要である	121	3.7521	.9856	3.188	8.2	*
	重要ではない	7	3.0000	.5774			
07 自分の過誤（ミス）は自分のせいだと感じる	重要である	112	4.2143	.7644	6.504	127	****
	重要ではない	17	2.8824	.9275			
08 自分にはいくつか見どころがあると思う	重要である	93	3.4516	.9385	3.698	126	****
	重要ではない	35	2.7429	1.0387			
09 自分自身について落胆するあまり何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえる	重要である	52	3.5192	1.0570	6.904	127	****
	重要ではない	77	2.1948	1.0765			
10 自己嫌悪（自分で自分がいやになる）をおぼえる	重要である	80	4.2625	.7588	7.070	69.7	****
	重要ではない	49	2.8571	1.2583			
11 自分自身のいろいろな能力について自信を持つ	重要である	113	3.0796	.9272	3.379	127	***
	重要ではない	16	2.2500	.8563			
12 誰かといっしょにいると楽しく感じる	重要である	128	4.4688	.6866	-.771	127	n.s.
	重要ではない	1	5.0000	.			
13 自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになる	重要である	37	3.0541	1.1772	4.007	127	****
	重要ではない	92	2.2391	.9875			

14 自分にはあまり得意に思う ことがない	重要である	49	3.2449	1.1642	3.007	127	***
	重要ではない	80	2.6750	.9649			
15 自分が他の人々たちとどの くらいうまくやっていたか気に する	重要である	106	4.0094	.8223	4.742	28.3	****
	重要ではない	23	2.9130	1.0407			
16 たいてい心を悩まさずに決 心する	重要である	51	2.5294	1.2223	2.564	81.5	*
	重要ではない	78	2.0256	.8524			
17 あなたの仕事ぶりや成績を 審査する立場にある人の批評を 気にする	重要である	86	4.2442	.6123	7.935	59.1	****
	重要ではない	43	2.9535	.9748			
18 他の人々がすでに集まって 話し合っている部屋に自分一人 で入っていくような場合、気兼 ねや不安をおぼえる	重要である	92	4.2174	.8231	6.589	51.9	****
	重要ではない	37	2.8649	1.1344			
19 人前を気にしたり、はにか みをおぼえる	重要である	89	3.9213	.8150	5.435	62.2	****
	重要ではない	40	2.9250	1.0225			
20 クラスや自分と同年代の人 々のグループの前で話すとき、 心配したり不安になる	重要である	67	3.7164	1.0270	6.756	127	****
	重要ではない	62	2.5161	.9875			
21 自分が知っている人は全部 好き	重要である	61	3.4754	.9593	7.680	127	****
	重要ではない	68	2.2500	.8530			
22 他の人々が見ている所でゲ ムやスポ・ツをやっており、 それにぜひ勝とうとする場合 に、取り乱したり、まごついたり (あがったり)する	重要である	56	3.6964	.8928	6.377	126.2	****
	重要ではない	73	2.5890	1.0780			
23 いつも自分のしていること を自慢する	重要である	12	3.0000	.7385	4.161	127	****
	重要ではない	117	1.9573	.8345			
24 他の人々から優等生と見ら れているか、あるいは、劣等生 と見られているか気になる	重要である	38	3.8421	.7543	10.867	90.1	****
	重要ではない	91	2.0989	.9894			
25 自分はかなり幸福だと感じ る	重要である	107	3.7383	1.0032	3.704	127	****
	重要ではない	22	2.8636	1.0372			
26 人と一緒にいるとき、どん なことを話題にしたらいかが困 る	重要である	69	3.7246	.8204	7.644	110.8	****
	重要ではない	59	2.4576	1.0225			
27 自分自身のことをよく知る	重要である	114	3.5175	.8438	4.012	127	****
	重要ではない	15	2.6000	.7368			
28 いつも最善をつくす	重要である	100	3.7000	.8587	6.993	127	****
	重要ではない	29	2.3793	1.0147			

29 とんでもないミスや、ばかにされるような大失敗をしでかしたときのことが気になる	重要である	79	4.1266	.7741	8.338	80.6	****
	重要ではない	50	2.6600	1.0806			
30 自分が同年代の人に人気がある	重要である	55	2.8000	.5900	4.179	126.5	****
	重要ではない	74	2.2703	.8488			
31 初対面の人と会ったとき時間つぶしに話をするのがむずかしい	重要である	57	3.7719	.9639	7.774	127	****
	重要ではない	72	2.4444	.9625			
32 自分自身に対して前向きな態度を取る	重要である	115	3.4696	1.1028	3.089	127	***
	重要ではない	14	2.5000	1.1602			
33 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて気になる	重要である	106	3.9811	.8393	5.125	127	****
	重要ではない	23	3.0000	.7977			
34 恥ずかしくてどうにもならない	重要である	64	3.1250	.9512	6.960	127	****
	重要ではない	65	2.0000	.8839			
35 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、自分が相手にどのような印象をあたえているか気になる	重要である	69	3.8986	.7101	9.170	100.6	****
	重要ではない	60	2.4167	1.0623			
36 たいていの人がやれる程度には物事ができる	重要である	83	3.5542	.7691	2.446	126	*
	重要ではない	45	3.1778	.9364			
37 他人があなたのことをどのように考えているか気になる	重要である	100	4.3000	.6742	6.542	34.7	****
	重要ではない	29	2.9310	1.0667			
38 友達や知り合いの中にあなたのことを良く思っていない人がいるかもしれないと考えたと、そのことが心配でならない	重要である	61	4.1475	.7924	12.355	127	****
	重要ではない	68	2.2794	.9117			
39 すべての点で自分に満足する	重要である	29	2.1724	.9662	1.439	126	n.s.
	重要ではない	99	1.9192	.7912			
40 ときどき確かに自分が役立たずだと感じる	重要である	59	3.7797	1.0012	5.041	127	****
	重要ではない	70	2.8714	1.0345			
41 少なくとも、自分が他人と同じレベルに立つだけの価値がある人だと思う	重要である	41	3.5610	.9759	3.926	66.5	****
	重要ではない	87	2.8736	.8041			
42 もう少し、自分を尊敬できたならばと思う	重要である	63	3.8413	.8837	6.167	125.7	****
	重要ではない	66	2.8030	1.0261			
43 どんなときでも例外なく自分は失敗者だと思いがち	重要である	22	3.1364	1.2834	3.931	25.3	.***
	重要ではない	107	2.0093	.8848			

* p,.05

** p,.01

*** p<.005

**** p<.001

<引用文献>

- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco :W.H. Freeman.
- Janis,I.L.,and Field,P.B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In Hovland,C.L.and Janis,I.L.,(Eds.)*Personality and Persuasibility*.New Haven:Yale Univ.Press.pp.55-68
- Rosenberg,M. 1965 *Society and adolescent self image*.Princeton,N.J.:Princeton University Press.

研究 2

Self-Esteem の自己認知的側面の検討 (1)
性格特性との関係

．目的

本研究では、研究1で用いた質問項目を用いて、self-esteemの自己認知的側面の4つの側面（「外面的で肯定的な自己の側面」・「外面的で否定的な自己の側面」・「内面的で肯定的な自己の側面」・「内面的で否定的な自己の側面」）と肯定的自己認知・否定的自己認知・内面的自己認知・外面的自己認知についてもその特徴を性格特性との関係から検討する。

自己の各側面は、内的準拠枠としての機能を有している。同様に、性格も「一般に人の行動の背後にあって、特徴的な行動の仕方、考え方を生み出し続けている態度の総体」(教育心理学新辞典第8版、金子書房、1978、p.526.)と定義される。特に、社会適応を考える上で性格は重要な概念である。現実場面でのどのような行動をとるかということは、個人の性格がどのような状態にあるかに依存する。この「肯定的で外面的な自己」の側面を重視し内的準拠枠として機能するとき、現実場面でもとられる行動とどのような関係にあるかを検討することが目的である。

．方法

．調査対象者

短大と短大相当の専門学校に在籍する女子学生 172 名を調査対象者とした。年齢は 18 才から 20 才に分布し、平均年齢は 18.84 才 (SD=.75)であった。

2．用具

a．性格特性の測定について

市販されている YG 性格検査を使用した。

b．自己の各側面の測定について

研究1と同一の質問紙を使用した。すなわち、代表的な Self-Esteem 質問紙 (Janis と Field,1959、Rosenberg,1965、Coopersmith,1967) から、肯定的な自己を表す項目 18 項目、否定的な自己を表す項目 16 項目を抽出し、さらに、質問項目の内容から肯定的内容の質問項目と否定的内容の質問項目に分類した。その結果、肯定的で内面的自己認知を示す項目が 10 項目 (Form A)、肯定的で外面的 (対人的・対社会的) 自己認知を示す項目が 8 項目 (Form B)、否定的で内面的自己認知を示す項目が 7 項目 (Form C)、否定的で外面的自己認知を示す項目が 9 項目 (Form D) となった (表 2 - 1)。

そして、それぞれの項目ごと、被験者がその質問内容を重要視する内容 (被験者にとり大切な事柄) か否かの回答を求めた。

「重要である」と回答された場合 1 点と採点し、「重要でない」と回答された場合は 0 点として処理をした。

内的整合性係数 () は、Form A (.588)、Form B (.483)、Form C (.618)、Form D (.729) と Form D 以外全般的に低い。留保つきの尺度と考えてもらいたい。

表2 - 1 自己の各側面を測定する項目

< 肯定的内面的自己認知を示す項目 > (Form A)	< 肯定的外面的自己認知を示す項目 > (Form B)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分は価値のある人間である。 ・ 自分で決心することができ、頑張ることができる。 ・ 自分にはいくつか見どころがあると思う。 ・ 自分自身のいろいろな能力について自信を持つ。 ・ たいてい心を悩ませずに決心する。 ・ 自分はかなり幸福だと感じる。 ・ 自分自身のことを良く知っている。 ・ いつも最善をつくす。 ・ 自分自身に対して前向きな態度を取る。 ・ すべての点で自分に満足する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私は信頼されている。 ・ 自分の知っている人々がいつか自分を尊敬のまなざしをもって仰ぎ見る日がくる。 ・ だれかと一緒にいると楽しく感じる。 ・ 自分が知っている人は全部好き。 ・ いつも自分のしていることを自慢する。 ・ 自分が同世代の人に人気がある。 ・ たいていの人ができる程度には物事ができる。 ・ 少なくとも、自分が他人と同じレベルに立つだけの価値がある人だと思う。
< 否定的内面的自己認知を示す項目 > (Form C)	< 否定的外面的自己認知を示す項目 > (Form D)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の過誤は (ミス) 自分のせいだと感じる。 ・ 自分自身について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑問をおぼえる。 ・ 自己嫌悪 (自分で自分がいやになる) をおぼえる。 ・ 自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持ちになる。 ・ 自分にはあまり得意に思うことがない。 ・ もう少し、自分を尊敬できたならばと思う。 ・ どんなときでも例外なく自分は失敗者だと思いがち。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ あなたの知っている大部分の人に比べて自分の方が劣っている。 ・ 自分が他の人々たちとどのくらいうまくやっていけるかを気にする。 ・ あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評が気になる。 ・ 他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に自分一人が入っていくような場合、気兼ねや不安をおぼえる。 ・ 人前を気にしたり、はにかみをおぼえる。 ・ クラスや自分と同年代の人々のグループの前で話すとき、心配したり不安になる。 ・ 他の人々が見ているところでゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうとする場合に、取り乱したり、まごついたり (あがったり) する。

- ・とんでもないミスや、ばかにされるような大失敗をしでかしたときのことになる。
- ・ときどき確かに自分が役立たずだと感じる。

・結果

YG 性格検査と Form A、Form B、Form C、Form D の得点，否定的自己認知の総得点（否定総点；Form C + Form D），肯定的自己認知の総得点（肯定総点；Form A + Form B），内面的自己認知の総得点（内面総点；Form A + Form C），外面的自己認知の総得点（外面総点；Form B + Form D）との相関（Spearman の順位相関）の値を表 2 - 2 に示す。

この結果、肯定的な内面的自己認知を示す項目（Form A）と有意な相関を示したもの

表 2 - 2 自己の各側面と YG 検査との相関値

	肯定内面	肯定外面	否定内面	否定外面	否定総点	肯定総点	内面総点	外面総点
	Form A	Form B	Form C	Form D	Form C+D	Form A+B	Form A+C	Form B+D
D 抑うつ性大	.073	-.006	.351**	.300**	.359**	.065	.270**	.235**
C 気分の変化大	.095	.124	.269**	.250**	.281**	.142**	.226**	.237**
I 劣等感	.126	.126	.410**	.500**	.527**	.158*	.335**	.432**
N 神経質	.105	.152*	.358**	.466**	.473**	.171*	.271**	.421**
O 主観的	.090	.053	.254**	.247**	.279**	.103	.214**	.214**
Co 非協動的	.014	.103	.319**	.238**	.311**	.091	.218**	.232**
Ag 攻撃的	.129	.204**	.097	-.050	.012	.189*	.153*	.057
G 活動的	.125	.148	-.266**	-.248**	-.290**	.134	-.070	-.124
R のんき	.128	.096	-.048	-.166*	-.130	.134	.064	-.090
T 思考的外向	-.143	-.040	-.174*	-.181*	-.191*	-.105	-.183*	-.163*
A 支配性大	.036	.022	-.278**	-.314**	-.341**	.007	-.141	-.233**
S 社会的外向	.021	.097	-.254**	-.295**	-.313**	.044	-.122	-.178*
E 系統値	.044	.059	.337**	.377**	.410**	.084	.236**	.308**
C 系統値	-.190*	-.182*	-.211**	-.189*	-.218**	-.212**	-.282**	-.231**
A 系統値	.077	-.041	.036	.060	.050	-.001	.098	.038
B 系統値	.072	.203**	.077	.102	.106	.174*	.094	.159*
D 系統値	-.073	.001	-.393**	-.436**	-.470**	-.066	-.290**	-.339**
情緒不安定	.112	.106	.413**	.446**	.484**	.149	.325**	.385**
社会的不適応	.089	.152*	.297**	.190*	.262**	.155*	.252**	.216**
活動的	.155*	.231**	-.095	-.170*	-.158*	.205**	.054	-.024
衝動的	.141	.146	-.196*	-.244**	-.253**	.154*	-.018	-.127
非内省的	-.027	.020	-.151*	-.221**	-.208**	-.002	-.091	-.167*
主導権	.029	.076	-.291**	-.316**	-.345**	.032	-.148	-.207**

**** 相関係数は 1% 水準で有意（両側）

* 相関係数は 5% 水準で有意（両側）

は、下位尺度では見られず，C 系統値と負の相関，因子得点の「活動的」で正の相関が見

られた。

肯定的な外面的自己認知を示す項目 (Form B) では、下位尺度の「神経質」と「攻撃的」で正の相関が見られ、「C系統値」で負の相関、「B系統値」で正の相関が見られた。因子得点では「社会的不適応」と「活動的」で正の相関が見られた。

否定的な内面的自己認知を示す項目 (Form C) では、多くの下位尺度、系統値、因子得点と有意な相関関係が見られた。逆に、有意な相関が見られなかったのは、下位尺度で「攻撃的」と「のんき」、系統値でA系統値とB系統値、因子得点では「活動的」だけであった。

否定的で外面的自己認知を示す項目 (Form D) も Form C と同様の傾向を示した。すなわち、有意な相関が見られなかったのは、下位尺度では「攻撃的」だけで、系統値では Form C と同一でA、B系統値で有意な相関が見られなかった。

否定的自己認知の総得点 (否定総点: Form C + Form D) でも、多くの下位尺度等と有意な相関が見られた。同様に有意な相関が見られなかったのは、下位尺度で「攻撃的」と「のんき」、系統値では、A系統値とB系統値であった。

肯定的自己認知の総得点 (肯定総点: Form A + Form B) では、有意な相関が見られたのは、下位因子で「気分の変化大」、「劣等感大」、「神経質」、「攻撃的」が正の相関、系統値ではE系統値で正の相関、C系統値とD系統値で負の相関が、因子得点で「社会的不適応」、「活動的」、「衝動的」が正の相関を示した。

内面的自己認知の総得点 (内面総点: Form A + Form C) で有意な相関が見られたのは、下位因子で「抑うつ性大」、「気分の変化大」、「劣等感大」、「神経質」、「主観的」、「非協調的」、「攻撃的」で正の相関が見られ、「思考的外向」で負の相関が見られた。系統値では、E系統値で正の相関、C系統値とD系統値で負の相関を示し、因子得点では「情緒不安定」と「社会的不適応」で正の相関が見られた。

外面的自己認知の総得点 (外面総点: Form B + Form D) では、下位因子で「抑うつ性大」、「気分の変化大」、「劣等感大」、「神経質」、「主観的」、「非協調的」が有意な正の相関を示し、「思考的外向」、「支配性大」、「社会的外向」で有意な負の相関を示した。系統値では、A系統値以外有意な相関を示したが、E系統値とB系統値が正の相関、C系統値とD系統値が負の相関を示した。因子得点で有意な相関を示したのは、「情緒不安定」と「社会的不適応」が正の相関で、「非内省的」と「主導権」が負の相関であった。

・考察

自己の否定的側面において、外面的側面と内面的側面が YG 検査とほとんど同様の相関関係を示した。自己の否定的側面において外面的側面と内面的側面が未分化な状態であることを示していると考えられる。また、自己の外面的側面と内面的側面においても、否定的側面ほどではないにしても、YG 検査との相関関係が類似している。自己の外面的側面と内面的側面も未分化な状態であることを示しているものと考えられる。このことを念頭におきながら、各側面の特徴について検討していく。

1. 自己の外面的側面

a. 肯定的側面

本研究では、YG 検査の下位尺度で、「神経質」と「攻撃的」だけに有意な正の相関が見られた。「神経質」で「攻撃的」な性格特性は、外面的で肯定的な自己の側面を重視することに関連していることを示している。

しかし、肯定的で外面的な自己の側面とは、平石（1990）が示した「健康 対他者」の領域に相当し、その結果が示すように「自己表明・対人積極性」・「異性・友人関係」・「他者受容」といった対人関係場面や社交場面での自己の積極的な振る舞い、他者受容といったように、余裕を持って安定した対人接触ができる健康的な自己の領域と考えられる。

本研究は、平石（1990）が示した特徴と逆の結果を示した。このことは、回答形式が平石（1990）の場合、「あてはまる」・「どちらかといえばあてはまる」・「どちらかといえばあてはまらない」・「あてはまらない」の4件法で回答を求めているのに対し、本研究では、質問項目の内容が「重要である」か「重要ではない」の2件法で回答を求めた違いにあると推測される。ただ単に「あてはまる」か否かの回答形式よりも、「重要である」か否かの回答形式では、何故「重要である」か、という内的準拠枠としての機能が含まれているためだと考えられる。単に「あてはまる」か否かの回答形式は、「知覚された自己」の側面が測定され、その中には内的準拠枠としての価値観が含まれていない可能性が高い。そしてそれは、「自己概念」を測定することと self-esteem の自己認知的側面を測定することが同義ではないことを示している。このように考えれば、「あてはまる」か否かの回答をしたときには、「自己表明・対人積極性」のような健康的な自己の側面が示されるが、「重要である」と回答したときには、内的準拠枠としての価値観が回答に入り込む可能性が考えられるため、直線的に肯定的な性格特性が関連してこなかったものと考えられる。

このため、肯定的な内容をもつ性格特性と相関関係を持たず、「神経質」・「攻撃的」という不適応状態を意味する性格特性と相関関係を示したものと考えられる。このように考えると、これは、対人接触場面や社交場面で他者に自分を肯定的に評価してもらうため、神経質になり攻撃的な気分するとき、そのまま他者に対して攻撃を向けず、逆に冷静になり、余裕をもって他者に接するといったことを表しているのではないだろうか。肯定的で健康的な自己の側面を直接他者に表現するのではなく、逆に、神経質になり攻撃的なときにそれを他者に気づかれ非難されることを恐れ、逆に冷静になるために、「自己表明・対人積極性」等の健康的な自己の側面のような他者から好まれる自己の側面を重視する。このため、この自己の側面を重視することが不適応状態を示す性格特性と相関関係を示しているのではないかと考えられる。

外面的で肯定的な自己の側面が、内的準拠枠として機能する場合、対他者場面などで自己の不適応感を他者に気づかれないようにする役割があることが示唆される。

b. 否定的側面

否定的側面については、内面的で否定的な側面とほとんど同様な相関関係を YG 検査と持った。このため、一括して考察する（後述）。

c. 自己の外面的側面の特徴

外面的自己認知の総得点（外面総点：FormB + Form D）では，下位因子で「抑うつ性大」，「気分の変化大」，「劣等感大」，「神経質」，「主観的」，「非協調的」が有意な正の相関を示し，「思考的外向」，「支配性大」，「社会的外向」で有意な負の相関を示した。系統値では，A系統値以外有意な相関を示したが，E系統値とB系統値が正の相関，C系統値とD系統値が負の相関を示した。因子得点で有意な相関を示したのは，「情緒不安定」と「社会的不適応」が正の相関で，「非内省的」と「主導権」が負の相関であった。

この有意な相関は，肯定的側面ではなく否定的側面と類似する相関関係であった。自己の対人関係領域や社交場面での自己意識は，否定的側面が性格特性と関連することを示している。自己の外面的側面でも否定的側面が重要視されていることを示している結果と考えられる。

2. 自己の内面的側面

a. 肯定的側面

肯定的で内面的な自己の側面とは，他者から分離した側面で，いわば「誰に何と言われようが自分にはこのような良い面がある」といった自負心の領域だと考えられる。

しかし，本研究で示された結果からは，YG 検査とほとんど有意な相関は見られず，わずかにC系統値と有意な負の相関，因子得点の「活動的」と有意な正の相関が見られただけであった。

C系統値は「情緒的には安定し，社会適応も良いが，消極的内向性でおとなしい，問題を起こさないタイプ」（高山，1993）の性格を示す指標である。肯定的で内面的な自己の側面を重視することは，C系統値の値が低くなることを示しているが，B系統値と有意な相関関係がないことから，情緒的に不安定で，社会的不適応に陥るところまではならず，活発に行動しているときに自負心を持つといった自己の側面と考えられる。

しかし，YG 検査の下位尺度と有意な相関がまったく見られなかったことは，肯定的で内面的な自己を重視することと性格との間に明確な関係がないことを示している。この自己の側面が平石（1990）が示した「自己実現的態度」，「充実感」，「自己受容・自己信頼感」を意味する領域であるとすれば，性格特性の心理的な安定を示す因子と何らかの相関を示すと考えられる。有意な相関がないということは，前述のように，内的準拠枠としての価値観が回答に含まれた結果，「自己実現的態度」のようなことは，目指すべき理想として認識され，性格特性と相関関係を持たないのではないだろうか。

b. 否定的側面

前述のとおり後述する。

c. 内面的自己認知の特徴

内面的自己認知の総得点（内面総点：FormA + Form C）で有意な相関が見られたのは，下位因子で「抑うつ性大」，「気分の変化大」，「劣等感大」，「神経質」，「主観的」，「非協調的」，「攻撃的」で正の相関が見られ，「思考的外向」で負の相関が見られた。系統値では，E系統値で正の相関，C系統値とD系統値で負の相関を示し，因子得点では「情緒不安定」

と「社会的不適応」で正の相関が見られた。

前述の外面的側面の特徴と同様、総得点是否定的側面と類似する相関関係を示している。それだけでなく、外面的側面の総得点とも類似する相関関係であった。自己の外面的側面と内面的側面が明確に分化していないことを示している結果と考えられる。

3．肯定的自己認知について

前述 1 - a , 2 - b のまとめである。肯定的自己認知の総得点（肯定総点：FormA + FormB）は、YG 検査の下位尺度で「気分の変化大」、「劣等感大」、「神経質」、「攻撃的」が正の相関、系統値では E 系統値で正の相関、C 系統値と D 系統値で負の相関が、因子得点で「社会的不適応」、「活動的」、「衝動的」が正の相関を示した。これは、「外面的で肯定的な自己の側面」と類似した相関関係である。

下位尺度の「攻撃的」について、辻岡（2000）は、「愛想の悪いことを表し、気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見を聞かないなど攻撃的な性質。この性格は情緒不安定（D・C・I・N）と結合すると社会的不適応を起こす。一方情緒安定と結合すると社会的にも活躍する社会的活動性となる。」（p.7）と述べている。

本研究の結果は、「攻撃的」は情緒不安定と結合した。自己の肯定的側面を重視すると社会的不適応を起こすことになる。系統値でも B 系統値と有意な正の相関を示しており、因子得点でも「社会的不適応」と有意な正の相関が見られている。

しかし、肯定的な自己の側面を重視することが、不適応をきたすということは矛盾する結果ではないかと考える。しかし、前述のとおり、「重視である」と回答したときに内的準拠枠としての価値観が含まれている可能性が高く、肯定的側面が「理想自己」的な努力目標として認識されれば、理想を重視したとき心理的圧迫感となり、逆に、理想に達していない未熟な自分に対する自己嫌悪と関連した結果と考えられる。

肯定的側面は、直接文字通りの意味で認識されず、内面的な側面は理想自己的な目標となり、外面的側面を重視することは、他者関係の中で、自分を否定的に評価されないための内的準拠枠として機能する自己の側面と考えられる。

4．否定的自己認知について

結果的に、否定的側面では、内面的自己認知（FormC）・外面的自己認知（FormD）とその総得点（FormC + FormD）とも同様な結果を示したため、ここで一括して検討することとする。

自己の否定的側面は、多くの性格特性と関連したわけであるが、共通して有意な相関関係をもたなかった性格特性は「攻撃的」だけであり、系統値では A 系統値と B 系統値である。

前述のとおり「攻撃的」は、「愛想の悪いことを表し、気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見を聞かないなど攻撃的な性質。この性格は情緒不安定（D・C・I・N）と結合すると社会的不適応を起こす。一方情緒安定と結合すると社会的にも活躍する社会的活動性となる。」（辻岡，2000）と解釈される因子である。また、E 系統値とは有意な正の相関、C、D 系統値とは有意な負の相関関係を示した。

自己の否定的側面を重視することは、消極的で情緒不安定な心理状態と関連しているが、

他者に対して攻撃が向かうということではないことを示唆する結果と考えられる。

また、自己の否定的側面では、外面的側面と内面的側面ともに、YG 検査の下位因子との相関がほとんど同様な相関関係を前述のとおり示した。このことは、自己の否定的側面において、外面的側面と内面的側面が未分化な状態にあることを示しているのではないだろうか。「他者からの分化」がなされていない自己認知の様式を示す結果と推測される。

5. まとめ

本研究の結果は、明確なかたちで自己の各側面の特徴をとらえることはできなかったが、自己の否定的側面で外面的側面と内面的側面が未分化なまま重視していることを示した。そして、肯定的側面よりも否定的側面が性格特性との関係が強く表れる結果も示している。青年期女子の self-esteem の自己認知的側面の特徴として、自己の否定的側面が内的準拠枠として機能していると考えられる。そしてこのことは、self-esteem の自己認知的側面を測定することは、単に「自己概念」を測定しているのではなく、内的準拠枠とも考えられる自己の側面をとらえられることを示した結果と考えられる。

<引用文献>

- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of self-esteem*. San Francisco :W.H. Freeman.
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造 - 自己確立観と自己拡散感からみた心理学的健康 - 教育心理学研究, **38**, 320-329 .
- Janis,I.L.,and Field,P.B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility.In Hovland,C.L.and Janis,I.L.,(Eds.)*Personality and Persuasibility*.New Haven:Yale Univ.Press.pp.55-68
- Rosenberg,M. 1965 *Society and adolescent self image*.Princeton,N.J.:Princeton University Press.
- 高山 巖 1993 矢田部ギルフォ - ド性格検査法 上里一郎監修「心理アセスメントハンドブック」西村書店 129-142
- 辻岡美延 2000 新性格検査法 - YG 性格検査応用・研究手引 - 日本心理テスト研究所

研究 3

Self-Esteem の自己認知的側面の検討 (2)
SEI-B を用いて , 性格特性との関係

1. 目的

前研究（研究2）では、自己の各側面の特徴を明確にとらえることができなかった。本研究でも、self-esteem の自己認知的側面の各側面を明確にしていくことが目的となる。このため、三田（1984）が因子分析した SEI-B（後述）の6つの下位因子が性格特性とどのような関係にあるかを研究2と同様のデザインで検討することとする。

三田（1984）は、Janis,I.S.と Field,P.B.A.（1959）が作成した23項目からなる尺度 Self-Esteem Inventory（以下 SEI）の質問文（翻訳は遠藤ら（1974）による）を用い、その質問項目の内容が、調査対象者個人にとり重要な質問内容か（意味のある質問内容か）否かを問う質問紙を作成した（以下 SEI-B）。この際、質問文の長い項目は、項目の意味が異ならない程度に文章を短くした項目もある。研究2で作成・使用した質問紙の内的整合性係数が低いなどの問題があるため、製作者である Janis,I.L.,and Field,P.B.（1959）が行った再検査法による信頼性係数が.83 と安定した尺度であるこの尺度を用い再度検討していく。

各項目に対し、「重要である」か「重要ではない」の2件法で回答を求め、因子分析を行い、主因子解の上バリマックス回転を行った。初期の固有値 1.0 以上で6因子が抽出されている（表3 - 1）。

表3 - 1 SEI-B 各因子に含まれる項目
（因子負荷量の多い順に表記した）

<p>第1因子（他者評価）</p> <p>23 他人があなたのことをどのように考えているか気になる。</p> <p>19 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて気になる。</p> <p>22 友達や知り合いの中に、あなたのことを良く思っていない人がいるかもしれないことを考えると、そのことが心配でならない。</p> <p>9 自分が他の人々と、どのくらいうまくやっっていけるかを気にする。</p> <p>21 自分の意見に同意しない人々を説得している場合、自分が相手にどのような印象を与えているか、気になる。</p> <p>10 あなたの仕事ぶりや、成績を審査する立場にある人の批評が気になる。</p>
<p>第2因子（社会的自己）</p> <p>12 人前を気にしたり、はにかみをおぼえる。</p> <p>13 クラスや自分と同年輩のグループの前で話すとき、心配したり、不安になる。</p> <p>11 他の人々がすでに集まって話し合っている部屋に、自分一人で入っていくような場合に、気兼ねや不安を覚える。</p> <p>14 他の人々が見ているところで、ゲームやスポーツをやっており、それにぜひ勝とうと思っている場合に、とり乱したり、まごついたり（あがったり）する。</p> <p>20 恥ずかしくてどうにもならない、と思う。</p> <p>18 初対面の人にあったとき、時間つぶしに話しをするのがむずかしい。</p>
<p>第3因子（否定的自己価値）</p> <p>6 自己嫌悪をおぼえる。</p> <p>5 あなたが、自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと、疑い</p>

をおぼえる。 4 自分の過誤（ミス）は、自分のせいだと感じる。
第4因子（肯定的自己価値） 7 自分のいろいろな能力について自信をもてる。 2 自分は価値ある人間である。 3 自分の知っている人が、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくる。
第5因子（劣等性） 1 あなたの知っている大部分の人と比べて、自分のほうが劣っている。 17 とんでもないミスや、馬鹿にされるような大失敗をしでかしたときのことが、気になる。 8 自分には、うまくやれることなど全然ないといった気持ちになる。
第6因子（コミュニケーション） 18 初対面の人にあったとき、時間つぶしに話しをするのがむずかしい。 16 人と一緒にいるとき、どんなことを話題にしたらよいか困る。

注...項目番号はSEIの項目番号と同一の番号を使用した。

この因子分析を行った当時の原データは、各因子の寄与率以外、現在残されていない。因子名の後の()内に原データでの寄与率を記しておく。第1因子「他者評価」(17.8%)、第2因子「社会的自己」(8.6%)、第3因子「否定的自己価値」(7.1%)、第4因子「肯定的自己価値」(6.5%)、第5因子「劣等性」(5.4%)、第6因子「コミュニケーション」(4.6%)。

本論の自己をとらえる視点は序論で述べたとおり、「外面的 - 内面的」・「肯定的 - 否定的」の軸から自己の領域を「外面的で肯定的な自己の側面」・「外面的で否定的な自己の側面」・「内面的で肯定的な自己の側面」・「内面的で否定的な自己の側面」というように4つの側面・領域からとらえ検討するようデザインされている。SEI-Bでの下位因子は、第1因子「他者評価」・第2因子「社会的自己」・第5因子「劣等性」・第6因子「コミュニケーション」が「外面的で否定的な自己の側面」を示す因子であり、第3因子「否定的自己価値」は「内面的で否定的な自己の側面」を示し、第4因子「肯定的自己価値」が「内面的で肯定的な自己の側面」を示す因子である。「外面的で肯定的な自己の側面」を表す因子がSEI-Bではない。

本研究でのデータから内的整合性係数()を算出した。第1因子.786、第2因子.705、第3因子.321、第4因子.345、第5因子.409、第6因子.606と項目数の少ない第3、4因子が特に低くなっている。留保付きのデータとして考えてもらいたい。参考までに「外面的で否定的な自己の側面」(第1、2、5、6因子)での内的整合性係数を算出したところ.832と良好な値が得られた。しかし、肯定・否定的側面を合わせた内面的な側面を表す項目で内的整合性係数を求めたところ.455となった。また、外面・内面的側面の否定的側面全体での内的整合性係数は.843(肯定的側面は第4因子のみなので肯定的側面全体では第4因子を参照してもらいたい)とやはり良好な値が得られた。否定的な内容の項目のだけの方が内的整合性は良く、一貫性が高い尺度になること、また、外面的で否定的な自己の側面だけを測定した方が、測定尺度として安定していることを示している。またこ

れは、外面的で否定的な自己の側面を重視しているという特徴を裏付ける結果とも推測される。しかし、分析においては6因子ごとの分析にだけ焦点を当てて行っていくことにする。

．方法

1．調査対象者

短大相当の専門学校に在籍する女子学生 93 人（平均年齢 19.1 歳，SD=.80，range18-21）を調査対象者とした。

2．測定用具・方法

a．性格特性の測定について

市販されている YG 性格検査と MPI（Maudsley Personality Inventory）を使用した。

b．self-esteem の自己認知的側面の測定

前述のとおり，SEI-B を使用した。

これは、先にも述べたとおり、個人の self-esteem が決まる際、まず、個人が自己のどの側面を重視するかが問題であり、換言すれば、個人が主観的に重要だとする自己の領域（自己認知の中心）がどこに置かれているかが一次的な問題と考えるからである。

このことは、研究 1 で示したように、「重要である」と回答した項目の自己評価得点（CSE 得点）が「重要ではない」と回答した項目の自己評価得点（非 CSE 得点）よりもほとんどの項目で有意に高い得点を示したことから妥当性はあるものとする。

回答方法は次のようになる。例えば、項目 7 「自分のいろいろな能力について自信をもてる」ということについては（あなたにとって重要な（意味のある）事柄ですか）？という質問をし、調査対象者に、1．重要である（意味がある）、2．重要でない（意味がない）のいずれかで回答をしてもらった。

「重要である」と回答した場合、1点と採点した。「重要ではない」と回答した場合には0点と処理をした。

．結果

YG 性格検査（YG 検査の 12 個の下位検査、系統値、因子得点との相関も求めた）、MPI の各下位尺度と SEI-B の 6 因子の相関（Spearman の順位相関）の値を表 3 - 2 に示す。

SEI-B の各因子は、全般的に活発さや外向的なニュアンスのある因子と負の相関を示し、逆に不安定さや消極的なニュアンスのある因子と正の相関を示している。

第 1 因子「他者評価」で有意な相関がみられたものは、YG 検査の「劣等感大」・「神経質」、YG 検査の系統値で「E 系統値」の 3 つに正の相関がみられ、YG 検査「活動的」、系統値の「D 系統値」で、また YG 検査の因子得点における「衝動的」・「内省的でない」の 4 つに負の相関がみられた。

表 3-2 SEI-BとYG検査・MPI各因子との相関値

	SEI-B の下位因子					
	他者評価	社会的自己	否定的自己価値	肯定的自己価値	劣等性	コミュニケーション
YG検査の下位因子						
抑うつ性大 (D)	.065	.128	.134	-.078	.132	.165
気分の変化大 (C)	-.002	.039	-.048	-.079	.123	-.016
劣等感大 (I)	.269 **	.195	.145	-.071	.293 ***	.176
神経質 (N)	.231 *	.195	.246*	-.026	.182	.159
主観的 (O)	.147	.112	.084	.147	.320 ***	.059
非協調的 (Co)	.016	.050	.188	-.130	.162	.082
攻撃的 (Ag)	-.111	.020	.008	.082	.060	-.057
活動的 (G)	-.204 *	-.177	-.157	.070	-.105	-.267 **
のんき (R)	-.158	-.098	-.192	.120	-.087	-.177
思考的外向 (T)	-.174	-.172	-.223*	.023	-.224 *	.017
支配性大 (A)	-.120	-.214 *	-.160	.186	-.181	-.367 *****
社会的外向 (S)	-.174	-.208 *	-.111	.166	-.189	-.317 ***
YG検査の系統値						
A系統値	.170	-.033	.027	-.088	-.041	-.147
B系統値	-.177	-.053	.087	.049	.021	.030
C系統値	-.045	.068	.004	-.016	-.050	.173
D系統値	-.243 *	-.116	-.198	.181	-.250 *	-.134
E系統値	.243 *	.266 **	.229*	.021	.330 *****	.289 ***
YG検査の因子得点						
情緒不安定 (D, C, I, N)	.185	.181	.224*	-.074	.236 *	.190
社会的不適応 (O, Co, Ag)	.006	.088	.134	.084	.251 *	.018
活動的 (Ag, G)	-.186	-.077	-.064	.107	-.006	-.186
衝動的 (G, R)	-.236 *	-.199	-.223*	.091	-.144	-.291 ***
内省的でない (R, T)	-.237 *	-.198	-.279**	.079	-.232 **	-.114
主導権を握る (A, S)	-.163	-.221 *	-.144	.190	-.205 *	-.361 *****
MPIの下位因子						
外向性 (E)	.062	.300 ***	.176	.151	-.198	-.355 *****
神経症的傾向 (N)	.188	.235 *	.180	-.018	.272 **	.087
虚偽発見尺度 (L)	-.054	-.111	-.127	.088	-.116	-.088

*...p<.05 **...p<.01 ***...p<.005 ****...p<.001

第2因子「社会的自己」で有意な相関が見られたのは、YG検査の「E系統値」、MPIの「神経症的傾向」で正の相関、YG検査「支配性大」・「社会的外向」、そしてこの2因

子が構成因子となっている因子得点での「主導権を握る」、MPI の「外向性」で負の相関が認められた。

第3因子「否定的自己価値」において有意な相関が見られたのは、YG 検査の「神経質」、系統値では「E系統値」、因子得点での「情緒不安定」に正の相関が、また、YG 検査の「思考的外向」、因子得点での「衝動的」・「内省的でない」に負の相関がみられた。

第4因子「肯定的自己価値」では、どの尺度とも有意な相関は認められなかった。

第5因子「劣等性」で有意な相関が見られたのは、YG 検査の「劣等感大」・「主観的」、系統値で「E系統値」、因子得点では「情緒不安定」・「社会的不適応」、MPI の「神経症的傾向」に正の相関が、YG 検査の「思考的外向」、因子得点の「内省的でない」・「主導権を握る」に負の相関がみられた。

第6因子「コミュニケーション」で有意な相関がみられた中で YG 検査の「E系統値」を除き、YG 検査の「活動的」・「支配性大」・「社会的外向」、因子得点での「衝動的」・「主導権を握る」、MPI の「外向性」と相関がみられたもの全て負の相関であった。「E系統値」だけが正の相関がみられた。

また、「E系統値」では、SEI-B の6因子中「肯定的自己価値」以外の5因子に有意な正の相関がみられた。

・考察

SEI-B の各因子が、全般的に活発さや外向的なニュアンスのある因子と負の相関を示し、逆に不安定さや消極的なニュアンスのある因子と正の相関を示していることは、SEI-B は、Janis と Field (1959) が作成した「自己不全感尺度 (Feeling Inadequacy scale)」を原盤とし、遠藤らにより標準化された自尊感情尺度 (SE-I 型) を基本としているため、自己に対する否定的な質問項目が多いためと考えられる。このことをまず念頭に置きながら考察を行っていきいたい。

また、虚偽発見尺度 (MPI の L 尺度) と SEI-B のいずれの因子とも有意な相関がみられなかったことは、この尺度本来の目的に従って、本研究で用いられた SEI-B への回答が虚偽により歪曲を受けておらず、信頼性の高い回答として理解していくこととしたい。

以下、SEI-B の各因子ごと self-esteem の自己認知的側面についての特徴を検討していく。

1. 自己の外面的側面

a. 第1因子「他者評価」

SEI-B の第1因子に含まれる項目は全項目とも、他者が自分をどのように見ているかを気にするといった内容である。この因子と有意な正の相関がみられた下位尺度は、YG 検査の「劣等感大」、「神経質」といった情緒不安定を示す尺度である。YG 検査の「劣等感」に含まれる項目の内容は、社会的場面での行動における自信の欠乏、自己の過少評価である。また、「神経質」はそれこそ神経質さ、心配症など自己の傷つきやすさを表している。「活動的」とは負の相関がみられ、心身両面での不活発さを示している。

因子得点でみると、「衝動的」と下位因子では有意な相関がみられなかった「内省的でない (G, T)」に有意な負の相関がみられた。

系統値でみると「E系統値」と正の相関、「D系統値」と負の相関がみられる。「D系統

値」は安定積極型をあらわす系統値でD型の性格傾向は「情緒的に安定しており、社会的にも適応は良く、かつ活動的、積極的、外向的であり、性格のよい面が外部に現れやすい。」、逆にE型の性格傾向は「D型と反対のタイプで、情緒的に不安定で社会的不適応、非活動的で消極的、内向的で性格のまずい、悪い面が内向するタイプである。」(高山、1993)といわれている。

これらことから、「他者評価」を重視することは、内省的で非衝動的、いわば、熟慮タイプで行動化しない性格特徴との関連が示唆される。「他者が自分をどのように見ているかを気にする」という自己の側面を重視する認知様式は、熟慮的だが考え過ぎてしまうためか、対人関係や社会的場面などの文脈の中で情緒不安定になり、行動化することなく、消極的になり内向してしまう、文字どおり他者からの評価を気にするあまりに人の目に対し過敏になって行動が内向しているためにおこる認知様式と関連する因子と考えられる。

b. 第2因子「社会的自己」

この因子に含まれる項目は、第1因子に類似する内容だが、第1因子が特に“他者から見られている自分”という内容が中心であるが、第2因子に含まれる項目は、“集団の中で見られている自分を気にする”という社会的場面における不安やはにかみといった内容を中心とした項目からなっている。

この因子と有意な相関をした尺度は、YG検査で「支配性大」と「社会的外向」、そしてこの2因子の上位因子である「主導権を握る」に負の相関がみられ、「E系統値」には正の相関がみられた。MPIの下位尺度とも相関がみられ、「外向性」とは負の相関が、「神経質傾向」とは正の相関がみられている。

「支配性大」と「社会的外向」、また「外向性」の対極概念は、それぞれ「服従的」、「社会的内向」、「内向性」であり社会的活動を好まない対人接触を避ける傾向を示している。すなわち、集団内でのリ・ダ・シップを好まない傾向 - 他者からの指示には従うが自分自身から指示を出したがる - や社会的場面での非活動性を示している。いわば、「成功回避動機」に似たものが働いているのではないだろうか。

この因子を重視することは、集団場面やグループ活動の際にいかに目立たないようにするか、かといって、“後ろ指”はさされたくないといった控え目に、かつ、“良い子”としても振る舞いたいという性格傾向と関連を持つと考えられる。

c. 第5因子「劣等性」

この因子は第3因子と類似する内容であるが、第3因子は自己価値についての否定的なイメージであるのに対し、この因子に含まれる項目は自他の相対的な比較における否定的イメージである。

この因子と有意な相関を示したものは、YG検査の「劣等感大」、「主観的」で正の相関が、「思考的外向」に負の相関がみられ、因子得点では「情緒不安定」、「社会的不適応」に正の相関、「内省的でない」、「主導権を握る」(この因子得点の下位因子A, Sには有意な相関はみられていないが)には負の相関がみられた。また、「E系統値」にも正の相関がみられている。MPIの「神経質傾向」にも正の相関がみられた。

相対的な自己の劣勢というときに基準となるのは、客観的・絶対的な基準があるわけで

もなく、あくまで、「優 劣」の相対的な比較という主観的な基準でしかないであろう。逆に考えれば、自己に対する客観的な基準を持ち合わせないことが、比較する他者のレベルにより自己の位置が変化し、非常に不安定なものとならざるを得ない。当然、情緒不安定、社会的不適応となる要因が十分にあるように思われる。「主導権を握る」にしても、自他の比較の中で自分がリ - ダ - シップをとれないといったふがいなさのあらわれかもしれないし、他者との関係の中でつい気おくれするだけでなく情緒不安定、社会的不適応の傾向の強い性格特徴があるのかもしれない。

「内省的ではない」に負の有意な相関がこの因子との間にもみられた。自己に関するいろいろな側面について気楽に見過ごすことができずに考え過ぎてしまう傾向が何らかのかたちで外面的で否定的な自己の側面を重視してしまうことに関係しているのかもしれない。

以上のことから、この「劣等性」因子を重視することは、自他の相対的な比較に基づき主観的に自己の劣勢を認め不安定になってしまう性格傾向と関連を持っていると考えられる。

d . 第 6 因子「コミュニケーション」

この因子に含まれる項目は 2 項目だけであるが、どちらも他者と話すときに気後れしてしまう内容を示す項目である。

この因子と有意な相関を示したものは、YG 検査の「活動的」、「支配性大」と「社会的外向」、この上位因子である因子得点での「主導権を握る」、同じく「衝動的」、そして MPI の「外向性」で負の相関が、「E 系統値」で正の相関がみられている。

心身両面での活発さもなく、社会的指導性や社交性、対人接触などといったものを避ける傾向にあり、熟慮的ではないかもしれないが衝動的な行動に走るわけでもなく、内向的な性格。第 5 因子「劣等性」と異なるところは情緒不安定や社会的不適応といった重篤な印象はなく、会話場面でつい気後れしてしまうときに機能している自己の側面と考えられる。

2 . 自己の内面的側面

a . 第 3 因子「否定的自己価値」

この因子に含まれる項目は自他の比較で自分が劣るという比較の問題ではなく、自己価値についての否定的側面を示す項目が含まれている。

この因子と有意な相関を示した尺度は、YG 検査の「神経質」(正の相関)、「思考的外向」(負の相関) 因子得点で「情緒不安定」(正の相関)、「衝動的」(負の相関)、「内省的でない」(負の相関) そして、「E 系統値」(正の相関) である。

言い換えれば、思考的内向、非衝動的、内省的などの“熟慮さ”を示す尺度(因子)と「E 系統値」に代表されるように精神的、情緒的な不安定さを示す尺度(因子)とに相関がみられている。

自己価値の否定的な側面を自分自身で見つめるということは誰にとっても不快な経験であると推測される。できることなら、長時間にわたり不快さを味わいたくないと多くの人には思うものとする。しかし、熟慮的であるからこそ、考え過ぎるあまり建設的な打開

策が見つからず、不安定さを増していくという悪循環を起こす性格傾向と関連する因子と思われる。

b. 第4因子「肯定的自己価値」

この因子は、第3因子とは逆に、自己価値に対する肯定的な側面をあらゆる項目からなっている。この因子は YG 検査、MPI の各下位尺度とひとつも有意な相関が認められなかった。

自己価値の肯定的な側面を重視することは、self-esteem の本質的な側面をみつめることとであると考える。個人が心理的に危機的な状況に陥っているとき、自分の自信の源に立ち返ることで危機的な状況を克服することも可能なことではないかと思うのだが…。YG 検査や MPI の精神的に健康的な因子や性格的に良い面とされる因子と有意な相関がみられてもおかしくないはずである。研究2で議論したように、回答形式を「重要である」とした場合、内的準拠枠としての価値観が含まれ、self-esteem の本質的な側面が直接的に表れてこないと考えられる。

研究2でも指摘したように、内面的で肯定的な自己の側面は、「理想自己」的な努力目標になっていて、現実場面でのどのような行動をとるかといった性格特性とは相関が見られなかったと考えられる。

3. 全体的討論

青年期の女性の self-esteem の自己認知的側面の特徴は、対人関係場面や社会的場面など外面的な自己の否定的な側面が性格特性と関連しやすいと考えられる。SEI-B の質問文の内容が否定的なニュアンスの強い項目が多かったためかもしれないが、しかし、自己の肯定的な側面を示す項目もあったにもかかわらず、この因子とはまったく有意な相関が認められなかった。

YG 検査の「E 系統値」が「肯定的自己価値」因子以外の5因子と有意な正の相関を示していることや YG 検査の因子得点における「内省的でない」に対し、SEI-B の「他者評価」、「否定的自己価値」、「劣等性」の3つの因子が有意な負の相関を示していることについての解釈を「内省的なため自己の否定的な側面が目につき、その結果、劣等感を抱き、自分の性格の悪い面が他者のまなざしにさらされることについて気になる」ととるか、「他者のまなざしを気にするあまり、自己の否定的な側面や自己の劣等性など自分の性格の悪い面を他者や公衆の面前にさらけ出さないように熟慮する」ととるかにより解釈が大きく異なる。研究2での結果や本研究の全般的なデータの結果から後者を探りたいと考える。本研究は相関分析であるが、研究2の「外面的で否定的な自己の側面」部分で検討したように、「重要である」か否かの回答形成では、それ自体に内的準拠枠としての価値観が含まれている可能性がある。このため、否定的な側面を内的準拠枠にするのであって、決して自己否定しているものではないと考える。「良く考えて、周囲の状況を気遣い、決して目立たぬように、自分の立ち居振る舞いに気をつける」といった外面的な行動様式を重視しているものとする。

本研究の結果は、外面的な自己を重視するという山本・松井・山成(1982)や梶田(1988)、また三田(1984, 1986)の調査と一致する。梶田(1988)は、「...たとえば、女子の場合、

他者のまなざしに関わるものが、諸意識の関連性の全体の中で大きな比重を占めている。...」(p.116)と述べているが、遠藤(1992)は性差について言及していないが、“なりたくないものにかになっっていないか”という負の理想自己が self-esteem の基準となることを指摘している。本研究でも、研究2と同様の結果が得られた。すなわち、外面的で否定的な自己の側面を内的準拠軸としているところが、青年期女子の self-esteem の自己認知的側面の特徴であることを示しているのではないかと考えられる。

<引用文献>

- 伊藤奈美子 1992 自己受容と性格特性の関連についての一考察 心理学研究, 63, 205-208
- 遠藤辰雄(編)1981 アイデンティティの心理学 ナカニシヤ出版
- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63 214-217
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学(第2版)東京大学出版会
- Janis,I.L.,and Field,P.B. 1959 Sex differences and personality factors related to persuasibility. In Hovland,C.L.and Janis,I.L.,(Eds.)*Personality and Persuasibility*.New Haven:Yale Univ.Press.pp.55-68
- 高山 巖 1993 矢田部ギルフォ - ド性格検査法 上里一郎監修 心理アセスメントハンドブック西村書店 pp.129-142
- 田端純一郎 1980 簡易尺度による自我同一性の研究 - 青年期の性差、女性の特質を中心に - 臨床教育心理学研究, 6, 12-16
- MPI研究会(訳・編) 1990 日本版モ - ズレイ性格検査手引 誠信書房
- 三田英二 1984 Self-Esteem に関する研究(1) - 青年期の発達的变化について - 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 10, 29-38
- 三田英二 1986 Self-Esteem に関する研究(2) - 青年期の性差について - 臨床教育心理学研究, 12, 15-21
- 山本真理子、松井豊、山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30 64-68

研究 4

自己認知に影響を与える要因の検討（1）
- 性格特性からの検討 -

．目的

研究3において，SEI-B で測定された self-esteem の自己認知的側面の各側面がどのような性質を持つものであるか明らかになった。では，どのような要因が自己の各側面を重視することに影響を与えるのかということを確認にしていくことが次の課題となる。本研究では，自己の各側面を明らかにするために使用してきた性格特性を説明変数として用い，SEI-B の6因子を各々目的変数とし，重回帰分析を行うことで因果関係から自己の各側面を重視することに影響を与える要因を探っていくことが目的である。

．方法

1．調査対象者

短大・専門学校に在籍する女子学生90名（平均年齢 19.18才、SD = 0.76）を調査対象者とした。

2．用具

（1）重視される自己の諸側面を測定する用具

研究3で用いた SEI-B を使用した。なお，この質問紙は，研究3で各因子ごとの特徴を YG 性格検査と MPI により検討されている。

（2）性格特性の測定

市販されている YG 性格検査を用いた。

．結果

SEI-B での6因子を目的変数とし YG 性格検査の12因子を説明変数として，重回帰分析を行った。分散分析の結果を表4 - 1に示す。

表4 - 1 重回帰分析の分散分析の結果

	分散分析	
他者評価	f(12,68)=4.36	p=.000
社会的自己	f(12,69)=4.18	p=.000
否定的自己価値	f(12,69)=2.56	p=.013
肯定的自己価値	f(12,69)=2.19	p=.022
劣等性	f(12,68)=4.65	p=.000
コミュニケーション	f(12,69)=3.79	p=.000

分散分析の結果はすべて有意であった。

次に、YG 性格検査の12の因子を説明変数として SEI-B の6因子を目的変数としたときの重回帰分析の結果を表4 - 2に示す。決定係数は，外面的で否定的な側面を表す因子においては概ね.4を越えるものもあったが，内面的自己認知を示す因子は.3を下回ったが，ある程度の説明率は確保されていると考える。

以上の結果は、「他者評価」因子を重視することは、「劣等感大」が強いことと「社

会的外向」の傾向があることに起因する。「社会的自己」因子を重視することは、「劣等感大」の強さと「のんき」な性格傾向が予測因子となる。「否定的自己価値」因子を重視することは、「協調的」(「非協調的 (Co)」の反対傾向)、「活動的」、「思考的内向」(「思考的外向 (T)」の反対傾向)、「服従的」(「支配性大 (A)」の反対傾向) が予測因子となる。「肯定的自己価値」因子を重視することは、「活動的」に起因する。「劣等性」因子を重視することは、「劣等感大」の強さと「攻撃性」の強さに起因する。「コミュニケーション」を重視することは、「気分の変化」が小さいことと「神経質」であることに起因する。

総じて、否定的で外面的な自己の側面を重視することは、「劣等感大」がその予測因子となっている。また、自己の内面的な側面を重視することは、否定的・肯定的両側面共通して「活動的」が予測因子となっている。

表4-2 SEI-Bの各因子を説明変数としYG検査の各下位因子を独立変数としたときの重回帰分析での標準偏回帰係数

	他者評価	社会的自己	否定的自己価値	肯定的自己価値	劣等性	コミュニケーション
抑うつ性大 (D)	-.335	.022	.103	.201	.099	-.038
気分の変化大 (C)	.070	-.176	.154	.048	-.170	-.492***
劣等感大 (I)	.555**	.458**	.263	.004	.748****	.297
神経質 (N)	.308	.105	-.102	.010	-.077	.512***
主観的 (O)	.050	.031	-.249	-.090	-.081	.020
非協調的 (Co)	.029	-.051	-.303*	.117	.043	.125
攻撃的 (Ag)	-.164	-.207	.189	-.069	.246*	-.049
活動的 (G)	.014	.089	.333*	.363*	.060	-.087
のんき (R)	-.160	.248*	-.021	.098	-.084	.141
思考的外向 (T)	.071	-.198	-.433**	-.215	-.085	.035
支配性大 (A)	.040	-.080	-.397*	-.233	-.093	-.080
社会的外向 (S)	.343*	-.173	.030	-.219	.128	.001
重相関係数	.659	.649	.539	.524	.671	.630
決定係数	.435	.421	.291	.275	.450	.397

* . . . p<.05 ** . . . p<.01 *** . . . p<.005 **** . . . p<.001

・考察

1. 自己の外面的側面について

SEI-B の下位因子は前述のとおり肯定的で外面的な側面を表す因子はない。否定的で外面的な自己の側面の特徴として、文字どおり自己否定しているのではなく、「他者のまなざしを気にするあまり、自己の否定的な側面や自己の劣等性など自分の性格の悪い面を他者や公衆の面前に出さないように熟慮する。」(研究3)という自己認知の様式であることが挙げられている。

今回の調査からは、否定的で外面的な自己の側面を重視することに影響を与える全般的な要因として「劣等感大」の強さが示された。このことは、自分の持つ劣等感を他者に気づかれないように外顯する行動に注意を払うために内的準拠棒として、外面的で否定的な自己の側面を重視すると考えられる。いわば、自分の持つ劣等感を覆い包み、他者に見せないようにするための内的準拠棒としての機能があるように推測される。

各目的変数ごと見ていくと、「他者評価」因子では、「劣等感大」以外に「社会的外向」が予測因子となった。「社会的外向」は「社交的で対人接触を好む性質を見る尺度」(高山、1993)を表す。「他者評価」因子は相関分析(研究3)では、「劣等感大」と「神経質」と有意な正の相関を示し、「活動的」で有意な負の相関を示している(表3-2)。そして、

「内省的で非衝動的な熟慮タイプで行動化しない性格傾向」と解釈されており(研究3) このような目的変数に対し「社会的外向」因子が予測因子となることは一見矛盾した結果のように見える。しかし、「対人接触を好む」からこそ、他者からの評価を気にするあまり、外顯する言動に注意を払うため「社会的外向」因子が目的変数「他者評価」因子の有意な説明変数となっていると考えられる。

「社会的自己」因子においては、「劣等感大」と「のんき」が予測因子となっている。「のんき」は「気軽さ、衝動的な性質」を表す因子(高山, 1993)である。「社会的自己」因子は、研究3において「支配性大」と「社会的外向」との間に有意な負の相関関係(表3-2)が見られ、「集団場面やグル-プ活動の際にいかに目立たないようにするか、かといって、“後ろ指”はさされたくないといった控え目に、かつ、“良い子”としても振る舞いたいという性格傾向」と関連する因子と考えられている。この場合も一見矛盾した予測因子のように感じられる。しかし、「気軽さ、衝動的な性質」が目立つと集団の中で浮き上がってしまう可能性が高い現状があるのかもしれない。このため自分の持つ劣等感や「のんきさ」が集団場面で露見しないように「社会的自己」因子を重視しているものと考えられる。

「劣等性」因子においては、「劣等感大」以外では、「攻撃的」因子が予測因子となった。研究3においては、「劣等感大」と「主観的」で有意な正の相関、「思考的外向」で有意な負の相関関係が示され、「自他の相対的な比較に基づき主観的に自己の劣勢を認め不安定になってしまう性格傾向」と関連する因子と解されている。人は self-esteem を維持したいという欲求を持っているという指摘(Epstein, S., 1973)がある。劣等感は self-esteem を低下させる要因であることには異論はないであろう。自分の self-esteem を維持するためにはある程度攻撃的になることも推測される。このような意味において、相対的に自己が劣るといった場面では、自分の心理的安定感を守るため「攻撃的」という性格特性が予測因子になるものと思われる。

「コミュニケーション」因子では、「劣等感大」は予測因子とならず、「気分の変化小」と「神経質」が予測因子となった。研究3で「コミュニケーション」因子は、「活動的」・「支配性大」・「社会的外向」と有意な負の相関関係を示し、「心身両面での活発さがなく、他者と話すときに気後れしてしまう」因子と解釈されている。コミュニケーション場面ではある程度陽気であることが求められると考えれば、「気分の変化小」(=話が盛り上がらない)ことや、「神経質」(=話し相手に嫌な思いを持たせる)であることが原因となり、「心身両面での活発さがなく、他者と話すときに気後れしてしまう」ことがないように気をつけるために重視している因子と考えられる。

2. 自己の内面的側面について

目的変数「否定的自己価値」因子のとき説明変数「協調的」(非協調的の反対傾向)「活動的」、「思考的内向」(思考的外向の反対傾向)「服従的」(支配性大の反対傾向)が予測因子となった。目的変数「肯定的自己価値」因子では、「活動的」だけが有意な説明変数であった。「活動的」因子が有意な説明変数として重複した。このことは、「活動的」にだけ行動していれば、自己の肯定感を支えるが、そのときに、他者と一緒(「協調的」因子)に活動してもそれが他者からの命令(「服従的」因子)により活動していると、自己の内

面的な側面に意識が及び自己嫌悪（「否定的自己価値」因子）してしまうことになるのではないだろうか。「活動的」因子が自己の内面的側面の肯定 否定的両側面で有意な正の説明変数となったことは、自己の内面的側面が未分化な状態を示唆する結果とも考えられる。わずかな状況の相違により、自己の肯定的側面と否定的側面が揺れ動く心性があるのではないだろうか。自己の内面的側面においても、肯定的側面と否定的側面が未分化な状態にあることが示唆される。

また、「肯定的自己価値」因子の有意な説明変数が「活動的」だけということは、他の性格特性とは因果関係を持たないことを示し、内面的で肯定的な自己の側面というのは、ほとんど現実場面に反映されない側面となっていることを示す結果とも考えられる。研究 2, 3 の結果を支持する結果と思われる。

<引用文献>

- Epstein, S. 1973 The self-concept revisited, or a theory of a theory. *American Psychologist*, 28, 404-416.
- 高山 巖 1993 「矢田部ギルフォード性格検査法」 上里一郎（監修）心理アセスメントハンドブック 西村書店
- 辻岡美延 2000 新性格検査法 - YG 性格検査応用・研究手引 - 日本心理テスト研究所

研究 5

自己認知に影響を与える要因の検討（2）
self-esteem からの検討

・目的

SEI-B の各因子を重視することに影響を与える要因について、さらに検討を加える。本研究では、自尊心 (self-esteem) が自己認知にどのような影響を与えるかを検討していくことを目的とする。

・方法

1．調査対象者

調査対象者については研究4と同一である。短大・専門学校に在籍する女子学生 90 名 (平均年齢 19.18 才) を調査対象者とした。

2．用具 (1) 重視される自己の諸側面を測定する用具

研究4と同一の SEI-B を使用した。

(2) Self-Esteem を測定する用具

Rosenberg Self-Esteem 尺度(以下、RSE)を使用した。この RSE は、self-esteem 尺度としては 10 項目という非常に短い構成からなる尺度である。self-esteem 自体を幅広く詳細に測定できないという短所もあるが、調査対象者に対する負担が少ないという利点や全般的な SE が測定できるといった利点があるため今回使用した。また、その因子の構造は単一構造とするものと複数の因子から構成されるとするものとの指摘 (Wylie,R.C.1974) があるが、本研究では、3 因子抽出されている三田 (2000) の結果を用い検討していく。各因子に含まれる項目を因子負荷量とともに表 5 - 1 に示す。

主成分分析の上、固有値 1.0 以上の 3 因子に対してバリマックス回転を行った。この 3 因子は全分散の 51.2 % (第 1 因子 30.3 % , 第 2 因子 13.4 % , 第 3 因子 10.4 %) を説明するものであった。このときの内的整合性係数 () は、第 1 因子.658 , 第 2 因子.667 , 第 3 因子.431 であった。今回データで を算出したところ、第 1 因子.768 , 第 2 因子 .619 , 第 3 因子.495 であった。

表 5 - 1 RSE の各下位因子に含まれる項目 (回転後)
第 1 因子「自己矮小感」

		負荷量
2	私は時々、自分がてんでダメだと思う。	.724
5	私にはあまり得意に思うことはない。	.444
6	私は時々確かに自分が役立たずだと感じる。	.708
8	もう少し自分を尊敬できたならばと思う。	.595
9	どんな時でも例外なく、自分を失敗者だと思いがちだ	.583

第 2 因子「自負心」

3	私は、自分にはいくつか見どころがあると思っている	.597
4	私はたいていの人がやれる程度には物事ができる。	.748
7	私は少なくとも自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人だと思う。	.819

第3因子「自己肯定感」

1	私はすべての点で自分に満足している。	.745
10	私は自分自身に対して前向きな態度をとっている。	.738

各項目に対し、「ほとんど思わない」(1点)から「非常にしばしば思う」(5点)までの5件法により回答を求めた。なお、第1因子「自己矮小感」は self-esteem にとっては逆転項目となり、得点が高い方が自己矮小感は弱くなり、得点が高い方が自己矮小感は強くなる。第2因子、第3因子は得点が高い方が高 self-esteem となる。

結果

SEI-B での6因子を目的変数とし RSE の3因子を説明変数として、重回帰分析を行った。決定係数、分散分析の結果を表5-1に示す。

表5-2 重回帰分析の分散分析の結果

目的変数	分散分析	
他者評価	f(3,84)= 2.07	p=.111
社会的自己	f(3,86)= 3.74	p=.014
否定的自己価値	f(3,86)= 8.37	p=.000
肯定的自己価値	f(3,86)= 2.76	p=.047
劣等性	f(3,85)=12.18	p=.000
コミュニケーション	f(3,86)= 4.08	p=.009

分散分析の結果は目的変数「他者評価」因子以外はすべて有意差が見られた。各目的変数の重回帰分析の結果を表5-3に示す。

表5-3 SEI-Bの各因子を説明変数としRSEの各下位因子を独立変数としたときの重回帰分析での標準偏回帰係数

	他者評価	社会的自己	否定的自己価値	肯定的自己価値	劣等性	コミュニケーション
自己矮小感	-.227	-.156	-.361***	-.323*	-.314**	-.164
自負心	.056	-.005	-.220	.120	.024	.064
自己肯定感	-.096	-.228	.066	-.034	-.330***	-.272*
重相関係数	.262	.339	.475	.297	.549	.354
決定係数	.069	.115	.226	.088	.301	.125

* * * * p<.05 * * * * p<.01 * * * * p<.005

決定係数が全般的に低いことや分散分析の結果有意ではない変数もあるため推測の域を出ないと思われるが、今回の調査結果からは可能性として以下のことが考えられる。「他者評価」因子を重視することは因果関係を示す変数は見られない。「社会的自己」を重視するための因果関係を示す変数は見られない。「否定的自己価値」因子を重視するのは「自己矮小感」が強いことに起因する。「肯定的自己価値」因子を重視するのは、「自

己矮小感」が強いことに起因する。「劣等性」因子を重視することは、「自己矮小感」の強さと「自己肯定感」の弱さに起因する。「コミュニケーション」因子を重視することは、「自己肯定感」の弱さに起因する。

・考察

本調査の重回帰分析の結果は、前述のように決定係数が全般的に低いことなどの問題がある。以下の考察は推測の域をでないものということを前提に進めていく。

1．自己の外面的側面について

本研究の結果からは、RSEの3つの下位因子は、いずれも目的変数「他者評価」因子、「社会的自己」因子の予測因子とはならなかった。「他者評価」因子も「社会的自己」因子も「対人場面や社交場面において自分がどのように評価されているか“わからない”ことを気にする」という内容である。

同様に否定的で外面的な自己の側面をあらわす目的変数「劣等性」因子において説明変数「自己矮小感」と「自己肯定感」が負の予測因子となった。同様に「コミュニケーション」因子において「自己肯定感」因子が負の予測因子となった。「劣等性」因子は「他者との比較の中で自己が劣る」ことをあらわしている。すなわち、自分の序列の劣勢が“わかっている”ことを意味している。また「コミュニケーション」因子は他者と話をするとときに緊張をおぼえる、気後れする（すなわち、自分の劣勢に気づいている＝“わかっている”）といった内容の因子である。

自己の外面的側面を重視することへ影響を与える要因として、「自己矮小感」があつたり、「自己肯定感」がないときに、すなわち、self-esteem が低下していることが原因で重視する自己の側面は、自他の相対的な比較から自己の劣勢を理解しているという自己の側面である。自他の相対的な比較により自己規定していることが反映されているものと考えられる。

逆に、自己の相対的な位置がわからないときには、self-esteem は重視する自己の側面には影響を与えない。

自己の側面の分化過程として、「外面 内面」よりも「肯定 否定」の側面での分化の方が早いことを研究2で指摘した。本研究の結果は、集団内での自分の序列・位置への理解がある場合、self-esteem と因果関係を持つが、自分の序列・位置の理解がない場合、self-esteem との因果関係は持たないことを示した。自己の外面的側面での分化過程は、否定的な側面での自他の相対的な比較から起こると推測される。

2．自己の内面的側面について

「否定的自己価値」因子、「肯定的自己価値」因子ともこれまでの調査からは、他の変数との関連があまり見られてこなかった因子であるが、この2因子は self-esteem の中核的な側面を示す因子と考えられる。

目的変数「否定的自己価値」因子において、有意な説明変数として「自己矮小感」が負の予測因子となった。すなわち、「自己矮小感」が強いことが、「否定的自己価値」因子を重視する要因となることを示した。「否定的自己価値」因子は相対的な自他の比較により自己が劣るという内容ではなく「内面的な自己価値についての否定的側面」であり「熟慮

的であるからこそ、考え過ぎるあまり建設的な打開策が見つからず、不安定さを増していくという悪循環を起こす性格傾向」と関連する因子と解されている(研究3)。すなわち文字どおり self-esteem の否定的側面をあらわす。自己矮小感が原因となって、この self-esteem の否定的側面を重視していることを示している。この場合、もともと目的変数と説明変数が密接な関係にあるためと考えられる。

興味深いのは、「肯定的自己価値」因子である。この因子は「理想自己」的な努力目標」になってしまっている因子と解釈(研究3)されている。この因子も「否定的自己価値」因子同様、「自己矮小感」の強さと因果関係があることを示した。「肯定的自己価値」因子は「否定的自己価値」因子の逆の側面、それこそ self-esteem の本質的な側面をあらわすものと考えられる。しかし、この側面を重視する要因となるものが、「自分が小さく見えること」であった。これは研究3で示されたような「肯定的自己価値」因子を理想自己的な目標としてとらえていることを裏付ける結果と考えられる。現状の自分の未熟さを意識したときに、理想とする自己を重要視する、あるいは、自らが掲げる理想に向かって努力しようとするのではないだろうか。あるいは、研究4で指摘したような自己の内面的側面が未分化なため、内面的な肯定感も否定感も同次元でとらえ、内面的な自己価値は心理的圧迫感としてとらえられてしまうのだろうか。

3. まとめ

本研究は、self-esteem 尺度 (RSE) を用い、self-esteem が自己認知の各側面にどのような影響を与えているか検討することを目的として行った。外面的側面では、自分の序列への理解がある場合、self-esteem は影響を与えるが、序列への理解がない場合は、self-esteem は有意な説明変数とはならないことを示した。また、RSE の下位尺度である「自負心」因子は、self-esteem の自己認知的各側面の有意な説明変数とはならなかった。「自負心」因子の内容は他者からの評価から分離し、自分自身で自分のことを評価する内容である。「他者からの分化」がなされていない段階と考えられる。

<引用文献>

三田英二 2000 女子青年の Self-Esteem と社会態度に関する因子分析的研究 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 13 - 2, 247-260

Wylie,R.C. 1974 The self-concept. vol.1 linclon:university of nebraska press.

研究 6

自己認知に影響を与える要因の検討（3）
親のしつけの型からの検討

・目的

自己の発達は、重要な他者 (significant others) との相互作用に大きく影響される。序論で述べたように、小高 (1998) は、青年期の対人関係は、一般的には友人関係や異性関係に重点が置かれるが、その基底には親子関係が継続し、青年にとって重要な意味を持つと述べている。また、日米の青年の親子関係を独立意識から比較検討を行った小野寺 (1993) は、日本の男女は米国の男女よりも、親を統制的に評価する傾向があることを報告している。このことは、小高 (1998) が指摘するように、青年期においても親を重要な他者として認知しているからこそ、青年は主観的に親の統制下に置かれていると感じ、その親から心理的自立を図ろうともがいていることを示すものと考えられる。

また、性役割の観点から検討した研究においても、女性の同一性地位や self-esteem を有意に区別するのは、女性性尺度ではなく、男性性尺度であった。

女性が“女性的”に生きるときには葛藤は起きないが self-esteem は上昇せず、self-esteem を高めようとしたときには、“男性的”な生き方をしなければならないという女性にとって非常に複雑な社会的な圧力がかかっていることが見え隠れしてくる。

この社会的な圧力としてまず考えられることが、幼少時に親が子どもに対して行う性別しつけである。本研究ではこれを取り上げ、幼少時に受けた性別しつけが重視される自己の側面にどのような影響をあたえているかを検討していくことを目的とする。

・方法

1．調査対象者

短大相当の専門学校に在籍する女子学生 93 名を調査対象者とした。年齢は 18 歳から 23 歳に分布し、平均年齢は 19.20 才 (SD = .93) であった。

2．用具

(1) しつけの型の測定

青年を対象に、幼少期にどのようなしつけを受けてきたかを調査した柏木 (1977) の結果を質問項目として使用した。全 38 項目となり、男性が受けてきたしつけの項目は 11 項目、女性が受けてきた項目として 27 項目である (表 6 - 1)。

この項目を各調査対象者に、「あなたの親があなたに対して行った (しつけの) 内容であれば、“はい”に、特にあなたに対して行わなかった (しつけの) 内容であれば“いいえ”に 印を付けてください。」という教示により回答を求めた。回答を求める際、特に「父親から」とか「母親から」受けたしつけということは教示せず、調査対象者の判断に任せた。親から受けたしつけ内容についての青年期に達している調査対象者たちの主観的な印象を求めたかったためである。

項目 1 ~ 11 までが男性的しつけ項目、項目 12 ~ 38 までが女性的しつけ項目として、“はい”に回答した場合 1 点と採点した。この結果、男性的しつけ得点の理論上の得点範囲は 0 点から 11 点となり、女性的しつけ得点の理論上の範囲は 0 点から 27 点となった。

なお、本調査でのこの質問項目の内的整合性係数 () は、男子的しつけ項目 .552、女性的しつけ項目 .755 と女性的しつけ項目は概ね良好なものであったが、男性的しつけ項目は留保つきの尺度として考えていきたい。

表 6 - 1 しつけの型測定のための質問項目

1	スポーツを大いに奨励する	21	礼儀作法を厳しくいう
2	体罰も辞さないほど厳しく罰する	22	外出先を必ずいわせる
3	スキー、ボーリングなど多少ぜいたくな遊びでもさせる	23	丁寧な言葉を使うよう注意する
4	臆病な態度をしかる	24	中学は別学のところや私立の学校も考慮する
5	多少無理なことでもなるべくひとりでやらせる	25	細やかな心づかいをするようにいう
6	学校の成績を気にする	26	子どもが困っている時、すぐ手を貸す
7	めそめそするのをしかる	27	ピアノやバイオリンのおけいこをさせる
8	大工仕事とか電気の仕事、力仕事などを頼む	28	小まめに働くようにいう
9	人前で泣いてはいけないという	29	無愛想な態度をとらないよう注意する
10	けんかに負けるなんてだらしないう	30	目上の人のいうことには素直に従うようにいう
11	塾に行かせる	31	自室の掃除、下着の洗濯など身の回りのことは自分でやらせる
12	わがままは許さない	32	親のいいつけを守るようにいう
13	美しく装うようにいう	33	出しゃばらず、つつましい態度をとるようにいう
14	帰宅時間についてやかましくいう	34	きちんとした身だしなみをする
15	料理の手伝いをさせる	35	強情をはらないよう注意する
16	理屈っぽいことをいうとたしなめる	36	奇抜な服装は注意する
17	座り方、戸のあけたてなど行儀についてやかましくいう	37	自分の衣服のつくりいやボタンつけなどは自分でやらせる
18	お客の接待を手伝わせる	38	けんかはしないようにという
19	異性との交際に気を配る		
20	家族にお茶を入れたりすることをたのむ		

(2) 重視される自己の諸側面の測定についてこれまで用いてきた SEI-B を使用した。

・結果

しつけの型の得点は、男性的しつけ得点の平均は 3.94(SD=2.08)、中央値は 4 であった。また、女性的しつけ得点は、平均 13.25(SD=4.71)、中央値 13 であった。それぞれ中央値をもとに高得点群、低得点群に分け、しつけの型を 4 群に分けた。その人数の内訳を表 6 - 2 に示す。

表6 - 2 しつけの型による群分け

しつけの型による群分け			人数
両性的しつけ群	(男性的しつけ得点 4、女性的しつけ得点	13	36
女性的しつけ群	(男性的しつけ得点 < 4、女性的しつけ得点	13	12
男性的しつけ群	(男性的しつけ得点 4、女性的しつけ得点 < 13		15
非男性的・非女性的しつけ群 (男性的しつけ得点 < 4、女性的しつけ得点 < 13			30

SEI-B の6因子の得点をしつけの型による群間で比較するため、最小有意差法により検定を行ったところ、幾つかの群間で有意差(5%レベル)が見られた。最小有意差法により有意差が見られたものを表6 - 3に示す。なお、「他者評価」因子は6点満点となり、「否定的自己価値」因子は3点満点、「肯定的自己価値」因子も3点満点となっている。

表6 - 3 最小有意差法により有意差が見られたもの

(注...欠損値があると自動的に排除されるため人数が異なっている)

「他者評価」因子	人数	得点の平均	標準偏差	両性	女性	男性	非
両性的しつけ群	35	4.26	1.52				
女性的しつけ群	12	3.42	1.88				*
男性的しつけ群	15	4.20	2.21				
非男性的・非女性的しつけ群	30	4.80	1.40		*		

「否定的自己価値」因子	人数	得点の平均	標準偏差	両性	女性	男性	非
両性的しつけ群	35	2.74	0.56			*	
女性的しつけ群	12	2.75	0.45				
男性的しつけ群	15	2.33	0.90	*			
非男性的・非女性的しつけ群	30	2.60	0.62				

「肯定的自己価値」因子	人数	得点の平均	標準偏差	両性	女性	男性	非
両性的しつけ群	36	1.92	0.60		*		
女性的しつけ群	12	1.42	0.79	*			
男性的しつけ群	15	1.93	0.80				
非男性的・非女性的しつけ群	30	1.83	0.79				

・考察

従来の研究の知見から、女子青年の自己認知の特徴として、外面的(対人関係場面や社会的場面など)な自己認知が優位だとされている。しかし、本研究の結果からは、外面的な自己の側面においても有意差が見られたが、内面的な自己認知を示す「否定的自己価値」因子と「肯定的自己価値」因子で有意差が見られたことは、女子青年にとってしつけの方略の違いにより重視される自己の側面が異なり、内面的な自己認知も何らかの影響を与えることを示唆すると考えられる。

「否定的自己価値」因子に含まれる項目は、自他の比較から自分が劣るといった比較の問題ではなく自己価値についての否定的側面を示す項目からなり、同様に、「肯定的自己

価値」因子は「否定的自己価値」因子とは逆に自己価値に対する肯定的な側面を表す項目からなっている。

以下、各群ごとに考察を行っていく。

(a) 両性的しつけ群

「否定的自己価値」因子で男性的しつけ群より、「肯定的自己価値」因子で女性的しつけ群より有意に重視する傾向が見られた。両性的しつけ群とは、他群に比べしつけ項目の得点が最も高い群である。換言すれば、親をとおしての社会的圧力を最も受けてきている群と考えられる。

梶田(1988)は、self-esteemを「自己へのまなざしを中心とした領域」と「他者のまなざしへの意識を中心とした領域」に分け、相対的な独立性を保ちながら発達していくことを主張している。内面的自己認知とは梶田(1988)のいう「自己へのまなざしを中心とした領域」に相当する

単純に考えれば、より多くのしつけを受けてきていると感じている方が自己の内面への重視度が高いと考えられる。しかし、両性的しつけ群は、女性的しつけ群と男性的しつけ群の重視される自己の側面の特徴をまさに兼ね備えているものと考えられるため、より詳細な考察はそれぞれの群のところで行っていきいたいと思う。

(b) 女性的しつけ群

「肯定的自己価値」因子での重視度が最も低く、両性的しつけ群との間に有意差が見られた。また、「否定的自己価値」因子において、他の群と有意差こそ見られなかったが最も得点は高いものであった。「他者評価」因子においても最も得点は低く、非男性的・非女性的しつけ群との間に有意差が見られた。

女性的しつけ項目は男性的しつけ項目の2倍以上あり、女性的しつけを社会的圧力として考えれば、しつけ項目の多さは行動の自由を制限するものとして考えられる。しかもその内容は礼儀作法を重視することや対人接触における細やかさを求められている項目が多い。

男性特徴に比し女性特徴に対する社会一般の評価が低いという指摘(柏木、1973,1989)から考えれば、女性として女性的しつけを受けてきたことで自己嫌悪や自己否定してしまうという部分もあるかもしれない。しかし、研究3や遠藤(1992)の指摘する「負の理想自己」を重視する自己認知様式という観点から考えると、言葉どおり「自己否定」しているわけではなく、行動が制限される項目が多いため、他者から注意・批判を受けないように自己の悪い部分を外に出さないように気をつけるという意味で自己の否定的な側面を内的準拠とした結果、「否定的自己価値」因子を重視しているとも考えられる。

「肯定的自己価値」因子の得点の低さは、制限される行動が多いため、そのことばかりに気を取られ、自己の可能性を積極的に展開していこうとする余裕がなくなってしまうのだろうか。その結果、自己の内面への洞察といっても、否定的な部分に目が行きがちになり肯定的な側面を重視する程度が低くなってしまうものと考えられる。

また、「他者評価」因子の得点の低さは、特に非男性的・非女性的しつけ群と有意差が見られたことから、しつけとは社会的場面においてどのように振る舞うべきかといった社

会的に望ましい行動を教えるという一面もある。伝統的な女性的しつけを受けてきた群(女性的しつけ群)と伝統的なしつけを受けてきていない群(非男性的・非女性的しつけ群)では、社会的場面における自分の行動への自信の持ち方が異なり、伝統的なしつけを受けてきている方が自分の行動に自信が持て、あまり他者の目を気にする必要がないのかもしれない。

(c) 男性的しつけ群

男性的しつけ群は女性的しつけ群とは逆に、「否定的自己価値」因子において最も得点が低く、両性的しつけ群との間に有意差が見られ、「肯定的自己価値」因子で他の群とは有意差は見られなかったが最も高い得点を示した。

男性的しつけ項目は女性的しつけ項目の半分以下であり、その内容は自立を目指したものや競争場面で勝つことなどである。概ね女性的しつけ項目の内容に比べ大まかなもの、自由裁量のとれる内容となっている。自分の可能性を試そうと自由闊達に行動するための内的準拠は自己の能力に自信を持つといったような肯定的な自己価値におかれるものと推測され、その際、自己の否定的な側面は重視されないものと考えられる。

田中(1995)の「...女子が、自己の理想を周囲の大人が考えるような女性性に重点をおいた場合、大きな問題は生じない。しかし、周囲がいわゆる女性的役割を女子に期待し、自己の持つ性役割観と大きくズレる場合、問題は深刻である。他者の目を気にするために、心の葛藤は女性自身の心の中で長く燻り続けることになる。...」という指摘もあるが、本研究の結果からは、Orlofsky(1977)や Prajer(1983)の研究や齋藤(1990)の「...セルフ・エスティームと性度尺度に関する各種の研究で、女子青年の場合も男性尺度のスコアの高さがセルフ・エスティームの高さと関係することは、すでに一般的な結果として認められている。」という指摘と一致する結果と考えられる。

(d) 非男性的・非女性的しつけ群

「他者評価」因子において最も重視度が高く、女性的しつけ群との間に有意差が見られた。「他者評価」因子は、他者から自分がどのように見られているかを気にするといった内容の因子である。この因子で、前述のとおり、非男性・非女性的しつけ群の得点が女性的しつけ群の得点を有意に上回った。得点が高い方がより他者の評価を気にすることを意味するため、伝統的なしつけを受けている群(女性的しつけ群)と伝統的なしつけを受けていない群(非男性・非女性的しつけ群)では、伝統的なしつけを受けていない人たちの方が他者の評価を気にする程度が高いことになる。

従来知見からすると、女子青年の自己認知の特徴としてあげられている外面的自己認知は、伝統的な女性的しつけを受けた女子青年ではなく伝統的なしつけを受けてきていないものが他者からの評価を気にする傾向があると解釈できる。前述のように、しつけとは、社会的場面でどのように振る舞うべきかという社会的に望ましい行動について教えるという一面もあり、社会的場面における自分の振る舞いに自信がもてなく、その結果、人がどのように自分を見ているかが気になるといったことになるのかもしれない。また、同一性理論は女子の発達過程になじまないという指摘もあるが、他者の評価を気にするということは、自他の未分化の状態を表すこととも考えられ、それは自我同一性の未確立を示すも

のとしても考えられる。女性としての振る舞いを学習してきている女子青年は、いわば女性としての伝統的な性役割観を他の群と比べ持ちやすくなってきていると考えられる。逆に、非男性・非女性的しつけ群は、革新的なしつけを受けてきた可能性もあるが、伝統的な性役割態度を学習してきたのではなく、社会的場面での自分自身の行動を測る尺度がなく、他者の目を気にする程度が高くなり、「他者評価」を内的準拠棒として用いる傾向が強くなることを示す結果と推測される。

(e) まとめ

本研究の結果は、検定力が低いながら、女性的しつけを受けてきた群と男性的しつけを受けてきた群で重視される自己の側面が異なる可能性を示唆するものであった。そしてそれは、従来から指摘されてきた女子青年の自己認知の様式の特徴である外面的な自己の側面ではなく内面的な自己の側面における相違であった。

同一性地位や self-esteem と性役割との関係から、女性性尺度ではなく男性性尺度が同一性地位や self-esteem と関連するという指摘は、同一性理論が肯定的な自己の側面との関連から形成された理論であるためかもしれない。

女性的しつけのように細部にわたる社会的圧力は、肯定的な自己の側面を重視する余裕がなくなり、他者から注意・批判を受けないように自己の否定的な側面を重視せざるを得なくなるものと推測される。逆に、男性的しつけのような自由裁量の幅が広く、社会的な圧力として余り働かないようなしつけを受けていると自己の肯定的な側面を内的準拠棒としている可能性が高いことが示唆される。

このように考えると、社会的な圧力がどのようにかかっているかにより重視される自己の側面が異なってくるとも考えられる。

本研究の結果からは、これまで女子青年にとって積極的な意味で浮かび上がってこなかった内面的で肯定的な自己の側面であるが、しつけの方略により関係することが示唆された。

<引用文献>

- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, **63**, 37-43.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版
- 柏木恵子 1973 現代青年の性役割取得 現代青年心理学講座, **5**, 101-139.
- 柏木恵子 1977 子どもの性意識の発達と適応 家庭科教育昭和52年7月増刊号
- 柏木恵子 1989 性役割と発達 心理学的視点から 教育と医学, **6**, 31-38. 慶応通信.
- 小高恵 1998 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, **46**, 333-342
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, **64**, 147-152.
- Orlofsky, J.L. 1977 Sex-role orientation, identity formation, and self-esteem in college men and women. *Sex Roles*, **6**, 561-575.
- Prajer, K.J. 1983 Identity status, sex-role orientation, and self-esteem in late adolescent females. *The Journal of Genetic Psychology*, **143**, 159-167.

- 齋藤久美子 1990 青年期後期と若い成人期 - 女性を中心に - 小川捷之、齋藤久美子、
鑪幹八郎 (編)「臨床心理学体系 3 - ライフサイクル - 」金子書房 163-176.
- 田中マユミ 1995 心理学的性差 柏木恵子 (編)「現代のエスプリ - 女性の発達 - 」至
文堂 18-34

研究 7

独立意識からみた青年期女子の自己の構造

．目的

前研究（研究6）において、しつけの方略により重視される自己の側面が異なる可能性が示唆された。本研究では、親からの独立意識を取り上げ検討する。まずは、青年期女子の自己認知の特徴について独立意識から検討するが、従来性差から検討されることが多かったため、本研究では、親からの影響が少なくなってきたと考えられる同性の青年期の一つ上の段階である成人期前期の女性と比較することで、青年期女子の self-esteem の自己認知的側面の特徴を検討する。

．方法

1．調査対象および方法

青年期の調査対象者（以下、青年期群）として、短大・専門学校に在籍する女子学生 90 名（平均年齢 19.18 歳、SD=.76、range18-21）。成人期前期の調査対象者（以下、成人期前期群）として、短大相当の専門学校を卒業した女性^(注1)（平均年齢 25.98 歳、SD=2.09、range22-30）とした。

青年期群は、授業中に調査用紙を配布・回収し、成人期前期群は、郵送により配布・回収した(回収率 60%)。

なお、成人期前期群調査対象者について、人権上の配慮から婚姻の有無の調査はしなかった。

2．調査内容

(1) self-esteem の自己認知的側面を測定する尺度

SEI-B^(注2)を使用した。

(2) 親に対する独立意識を測定する尺度

加藤・高木（1980）が作成した 37 項目からなる独立意識尺度を使用した。オリジナルの尺度は、中学生・高校生・大学生を調査対象として因子分析され、3 因子が抽出されている。第 1 因子「独立性」(項目 1、4、5、7、8、9、11、12、13、17)、第 2 因子「親への依存性」(項目 20、21、24、25、26)、第 3 因子「反抗・内的混乱」(項目 28、30、32、33、34)となっている。しかし、本研究の場合、調査対象者の年齢などが異なっており、また、加藤・高木の調査から 20 年以上が経過していることもあり、因子構造も変化している可能性が考えられるため、改めて因子分析を行い、その結果を用いて分析を行いたいと考えている。

各項目ごと「全く自分にあてはまる」から「全く自分にあてはまらない」までの 5 件法により回答を求め、「全く自分にあてはまる」を 5 点とし、順次「全く自分にあてはまらない」まで 4、3、2、1 点として処理を行った。

なお、親に関係する項目への回答にあたっては、特に「父親に対して」あるいは「母親に対して」ということは教示せず、回答者の判断に任せた。青年期群での調査において、調査対象者からはこの点に関する質問は全くなかった（成人期前期群では郵送による調査

のためこの点に関しては不明である)。

表 7-1 独立意識尺度の因子分析結果 (回転後)

	I	II	III	IV	V	共通性
6. 人の意見もよく聞くが、最終的には自分で決断できる。	.740	-.014	-.031	.036	-.056	.553
8. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。	.712	.046	.016	.294	-.109	.608
5. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。	.699	.008	-.257	-.077	.038	.562
36. どうしたらよいのか、自分で決心できないことが多い。	-.661	.139	.276	.278	.275	.686
4. 自分自身の判断に責任を持って行動することができる。	.625	-.125	.026	-.135	-.059	.429
35. 他人の意見や流行に、つい引き込まれてしまう。	-.585	.049	.043	.203	.237	.443
7. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。	.583	.227	-.345	.115	.108	.535
10. 自分の意見を言えずに、相手に従ってしまうことが多い。	-.570	.190	.222	-.111	.262	.491
9. 小さなことでも、自分で決断することができない。	-.519	.026	.186	.120	.216	.366
22. つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。	-.035	.831	.051	.002	.059	.698
20. 親といるだけで何となく安心できる。	-.060	.795	.148	-.067	.021	.662
24. 親は自分の心の支えである。	.014	.786	.014	.030	.018	.620
23. できることなら、いつも両親と一緒にいたい。	-.014	.783	.026	-.056	.057	.620
21. 困った時は親に頼りたくなる。	-.141	.714	.149	.010	-.025	.553
25. 何かする時には、親にはげましてもらいたい。	-.049	.653	-.078	.260	.312	.600
33. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない。	-.143	-.645	.048	.259	.160	.531
27. 親には何かにつけ、味方になってもらいたい。	-.073	.543	-.086	.256	.382	.519
14. 将来、どんな職業についたらよいかわからない。	.015	.062	.857	.028	.126	.755
13. 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。	-.194	-.005	.758	.150	-.010	.635
3. 時分の将来の進路や目標を自分で決めることができる。	.324	-.121	-.687	-.023	-.159	.618
31. 両親について反抗し、あとで後悔することが多い。	-.067	.177	.064	.698	-.180	.560
30. 親や先生のいうことには、たとえ正しくても反対したくなる	-.010	-.030	.063	.691	-.098	.492
28. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。	.113	-.325	.110	.575	-.031	.461
37. いつでも相手になってくれる友達がほしい。	-.290	.113	-.047	.531	.066	.385
18. 親にさからえないで、言うとおりになってしまうやすい。	-.124	.025	.141	-.033	.748	.597
29. 親の言うことには素直に従っている。	.007	.295	.029	-.329	.637	.602
26. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている	-.065	.469	.035	.153	.543	.544
34. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信を持ってない。	-.267	-.300	.031	.213	.526	.484
17. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひげめを感じることはない。	.279	.003	-.110	.037	-.517	.359
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある。	.495	-.014	-.472	-.159	-.112	.506
2. 人生で出会う多くの困難は、自分の力で克服することができると思う。	.291	-.023	-.363	-.248	.079	.285
11. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う。	.466	.119	-.423	.026	.015	.412
12. 自分の考えが変わりやすく自信をもてない。	-.488	.070	.171	.413	.145	.464
15. 自分の意志で、欲望や感情をコントロールする(がまんしたり、調節したりする)ことができる。	.134	.029	-.155	-.493	-.246	.346
16. 自分の考えや行動を抑えられたり、統制されたりすることには強い反発を感じる。	.151	-.097	-.229	.418	-.034	.261
19. 外から与えられたわくの中で生活する方が安心できる。	-.148	.133	.481	-.049	.334	.385
32. 大人に対してひげめを感じることも多い。	-.081	.116	.259	.446	.304	.378
二乗和	7.48	4.83	2.85	2.02	1.83	
寄与率(%)	20.2	13.0	7.7	5.5	4.9	

．結果

1．独立意識尺度の因子分析と因子命名

独立意識尺度を青年期群・成人期前期群併せて全体で因子分析し、主成分分析のうえバリマックス回転を行った。初期の固有値 1.0 以上で 9 因子が抽出された。しかし、因子の解釈において困難な因子があり、抽出因子数を 8 因子から 2 因子まで順次因子分析を行った。結局、固有値間の開きの程度、因子の解釈可能性、重複項目などを考慮し 5 因子を出し、絶対値 .5 以上の負荷量を示した項目を各因子の解釈の対象とした。5 個の因子は全分散の 51.4 % を説明するものであった。

回転後の各項目への因子負荷量を表 7 - 1 に示す。

第 1 因子は全分散の 20.2 % を説明するもので、自らの意志により行動・主張できるといった内容を示す項目（項目 4, 5, 6, 7, 8）が正に負荷し、逆に、自ら決断できないといったことや他者の意見について従ってしまうという内容の項目（項目 9, 10, 35, 36）が負に負荷した。「自己決断力」と命名する。

第 2 因子は全分散の 13.0 % を説明し、親に対する依存心を表す内容の項目（項目 20, 21, 22, 23, 24, 25, 27）が正に負荷し、逆に親に依存したくないといった内容の項目（項目 33）が負に負荷した。「親への依存」と命名する。

第 3 因子は全分散の 7.7 % を説明するもので、将来に対する不安を表す内容の項目（項目 13, 14）が正の負荷を示し、将来展望の確信を示す内容の項目（項目 3）が負の負荷を示した。「時間的展望の拡散」と命名する。

第 4 因子は全分散の 5.5 % を説明し、第 2 反抗期特有の心理状態を示す項目（項目 28, 30, 31, 37）で占められた。「反抗期心理」と命名する。

第 5 因子は全分散の 4.9 % を説明するもので、自信がない、あるいは決心できないために親の指示通りに行動するといった内容の項目（項目 18, 26, 29, 34）が正に負荷し、人としての尊厳を守るといった内容の項目（項目 17）が負の負荷を示した。「自信の欠如による親への服従（以下、「親への服従」と略記）」と命名する。

加藤・高木（1980）が行った因子分析では 3 因子抽出されたが、本研究では結局 5 因子が抽出された。しかし、内容的には加藤・高木（1980）の結果と同様に独立心・依存心・反抗期的心理状態を示す因子が抽出された他、同一性形成に関連するような「自己決断力」と「時間的展望の拡散」因子が抽出されたことは、調査対象者の年齢の相違が影響しているものと推測される。

内的整合性係数（ α ）は、第 1 因子 .850、第 2 因子 .876、第 3 因子 .809、第 4 因子 .619、第 5 因子 .680 と第 3 因子まではある程度良好な値を示した。

2．self-esteem の自己認知的側面に対する重視度の差異の検討

青年期群と成人期前期群における self-esteem の自己認知的側面に対する重視度の差異を検討するため、SEI-B の 6 個の下位因子の平均点を青年期群と成人期前期群それぞれ求め t 検定を行った。また、副次的に独立意識尺度の各下位因子も、青年期群・成人期前期群ごと平均点を求め同様に t 検定を行った。この結果を表 7 - 2 に示す。

有意差が見られたものは、SEI-B では、「他者評価」（青年期群 > 成人期前期群）、「コミュニケーション」（青年期群 > 成人期前期群）であった。独立意識尺度では、「自己決断力」

(青年期群 < 成人期前期群)、「反抗期心理」(青年期群 > 成人期前期群)であった。また、有意傾向が見られたものは、SEI-B では「社会的自己」(青年期群 > 成人期前期群)、独立意識尺度では「時間的展望の拡散」(青年期群 > 成人期前期群)であった。

これらの結果から、成人期前期群と比較した場合の青年期群の特徴や女性の自己発達の特徴として以下のことが指摘できる。青年期では、他者から自己がどのように見られ評価されているかといった自己の外面的側面(「他者評価」・「社会的自己」・「コミュニケーション」因子)を重視する。しかし、発達的にそれが徐々に気にならなくなっていく過程を示す。他者との比較により自己が劣る(「劣等性」因子)といったことを重視する程度は、青年期群・成人期前期群間で差異は見られない。

表7-2 SEI-Bの各下位因子と独立意識尺度の各下位因子の
青年期群と成人期前期群の平均値の差の検定

		人数	平均値	標準偏差	t 値	自由度	p
他者評価	青年期群	88	4.14	1.66	2.921	166	**
	成人期前期群	80	3.34	1.88			
社会的自己	青年期群	90	3.39	1.46	1.896	139.31	+
	成人期前期群	78	2.87	1.99			
否定的自己価値	青年期群	90	2.12	0.88	0.067	168	N.S.
	成人期前期群	80	2.11	1.01			
肯定的自己価値	青年期群	90	2.11	0.71	0.942	168	N.S.
	成人期前期群	80	2.00	0.83			
劣等性	青年期群	89	1.54	0.92	1.601	167	N.S.
	成人期前期群	80	1.31	0.92			
コミュニケーション	青年期群	90	1.12	0.85	2.390	167	*
	成人期前期群	79	0.81	0.85			
自己決断力	青年期群	90	29.93	6.22	-2.432	167.35	*
	成人期前期群	80	32.06	5.19			
親への依存	青年期群	90	24.48	6.24	0.373	168	N.S.
	成人期前期群	80	24.10	6.97			
時間的展望の拡散	青年期群	90	7.38	3.16	1.855	167.92	+
	成人期前期群	80	6.54	2.75			
反抗期心理	青年期群	89	12.51	2.95	3.176	167	**
	成人期前期群	80	11.06	2.95			
親への服従	青年期群	90	11.86	3.37	1.200	168	N.S.
	成人期前期群	80	11.26	3.04			

(注) + p<.10 * p<.05 ** p<.01

自己の内的側面を示す因子(「否定的自己価値」・「肯定的自己価値」因子)においても、青年期群・成人期前期群間で重視度には差異は見られない。

副次的に、独立意識尺度において成人期前期群と比較した場合の青年期群の特徴としては、自己決断力(「自己決断力」因子)が低いこと、

将来に向けた不安(「時間的展望の拡散」因子)が高いことや反抗期的心理状態(「反抗期心理」因子)が高いといった同一性獲得に向けてもがいていることを示す結果が得られたが、親に依存する(「親への依存」因子)・服従する(「親への服従」因子)といった因子では、成人期前期群との間で差異が見られなかった。

3 . self-esteem の自己認知的側面に影響を与える要因の検討

次に、独立意識尺度が self-esteem の自己認知的側面にどのような影響を与えているかを検討するため、SEI-B の6因子それぞれを目的変数とし、独立意識尺度で抽出された5因子を説明変数として青年期群・成人期前期群別々に重回帰分析を行った。決定係数は一般的に低いものであった。重相関係数は、青年期群において全て有意であったのに対し、成人期前期群において「肯定的自己価値」は有意ではなく、「コミュニケーション」は有

意傾向にとどまったが、その他の因子では全て有意であった。

表7-3に重回帰式で得られた標準偏回帰係数を示す。標準偏回帰係数が有意であったのは、「他者評価」を目的変数としたとき、青年期群で「自己決断力」($t=-3.15, p<.01$)、成人期前期群で「親への依存」($t=2.07, p<.05$)、「反抗期心理」($t=2.08, p<.05$)であった。以下同様に目的変数「社会的自己」の青年期群で「自己決断力」($t=-2.75, p<.01$)、「親への依存」($t=2.42, p<.05$)、成人期前期群ではなく、目的変数「否定的自己価値」で青年期群は「親への服従」($t=2.52, p<.05$)、成人期前期群で「時間的展望の拡散」($t=3.37, p<.001$)、「反抗期心理」($t=2.23, p<.05$)、目的変数「肯定的自己価値」では青年期群ではなく、成人期前期群で「親への服従」($t=2.06, p<.05$)^{注4}、目的変数「劣等性」の青年期群で「自己決断力」($t=-2.23, p<.05$)、成人期前期群ではなく、目的変数「コミュニケーション」の青年期群で「時間的展望の拡散」($t=2.49, p<.05$)、成人期前期群ではなかった。

表7-3 SEI-Bの各因子を目的変数とし独立意識尺度の各因子を説明変数としたときの重回帰分析での標準偏回帰係数

		他者評価	社会的自己	否定的自己価値	肯定的自己価値	劣等性	コミュニケーション
青年期群	自己決断力	-.352***	-.305***	.053	-.089	-.265*	-.127
	親への依存	.045	.241*	.157	.182	.014	.039
	展望拡散	-.058	.198	.211	.214	.172	.276*
	反抗期心理	.110	-.104	-.101	-.016	.024	-.056
	親への服従	.214	-.003	.281*	.071	.170	.101
	重相関係数	.486	.487	.416	.352	.444	.372
	決定係数	.236	.237	.173	.124	.197	.138
成人期前期群	自己決断力	-.162	-.246	.197	-.092	-.142	-.201
	親への依存	.235*	.136	.168	.017	.117	.158
	展望拡散	.098	.044	.459****	-.094	.248	.121
	反抗期心理	.216*	.108	.235*	.057	.182	.031
	親への服従	.058	.185	-.160	.284*	-.030	-.005
	重相関係数	.453	.465	.430	.299	.409	.350
	決定係数	.205	.217	.185	.090	.167	.122

(注) * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

重回帰分析においては決定係数が全般的に低いことや、成人期前期群のデータにおいて重相関係数が有意ではない因子もあるが、今回の調査結果は可能性として以下のことを示しているものと思われる。「他者評価」を重視することは、青年期群では、「自己決断力」が低いことに起因し、成人期前期群では、「親への依存」・「反抗期心理」が高いことに起因することを示している。「社会的自己」を重視することは、青年期群では、「自己決断力」が低いことと「親への依存」が高いことに起因し、成人期前期群では、そのような影響はなくなってきていることを示唆している。「否定的自己価値」を重視することは、青年期群では、「親への服従」が高いことに起因し、成人期前期群では、「時間的展望の拡散」と「反抗期心理」が強いことに起因することを示している。「肯定的自己価値」を重視することは、青年期群では、因果関係を示す変数は認められず、成人期前期群では、「親への服従」が高いことに起因する。「劣等性」を重視することは、青年期群

では、「自己決断力」の低さに起因し、成人期前期群においては特に因果関係を示す変数は認められなかった。「コミュニケーション」を重視することは、青年期群では、「時間的展望の拡散」の強さに起因し、成人期前期群においては特に因果関係を示す変数は見られなかった。

・考察

1 . self-esteem の自己認知的側面の重視度からみた青年期の自己形成の特徴

山本・松井・山成(1982)は、性差の観点から、女性是对人的な側面や社会的属性などの自己の外面的側面が重要なものとなっていることを示した。遠藤(1992)は、「『絶対になりたくないと思っている人間に現実にはいかになっていないか』ということの方が自己評価感情を強く支えている」と自己の否定的側面を重視する傾向があることを指摘している。本研究の結果(表7-2)から、同性の成人期前期と比べた場合でも、青年期において、外面的で否定的な自己の側面を重視する傾向が示され、研究2,3の結果とも一致する。

しかし、「劣等性」因子において、青年期群・成人期前期群間に重視度で差異が見られない(表7-2)。このため、重視度からみた青年期の自己形成の特徴として、自他の相対的な比較から、自己の劣勢に基づいて文字どおり自己否定しているとは考えにくい。それよりも、自分がどのように見られ評価されているか分からない対人場面や社交場面において、自己の否定的な側面が外顕し、他者にそれを気づかれてしまうことを避けるため、外面的で否定的な自己の側面を内的準拠枠として重視した結果、と考えた方が妥当なものではないだろうか。これは、「集団内での自分の序列・位置の理解がある場合は self-esteem と因果関係を持つが、自分の序列・位置への理解がない場合、self-esteem と因果関係を持たない」という研究5の結果を支持するものと考えられる。

内面的自己認知を示す「否定的自己価値」・「肯定的自己価値」因子ともに、重視度において、青年期群・成人期前期群間に有意差は見られなかった。自己の内面的側面への重視度には、青年期・成人期前期間で差異はないものと考えられた。

2 . self-esteem の自己認知的側面に影響を与える要因からみた青年期の自己形成の特徴

(1) 自己の外面的側面

青年期群では、外面的な自己の側面を示す4因子中3因子に「自己決断力」因子が有意な説明変数となった。しかし、成人期前期群では、4因子全てに「自己決断力」の影響は見られなかった。また、青年期群では、目的変数「社会的自己」因子で「親への依存」因子が、目的変数「コミュニケーション」因子で「時間的展望の拡散」因子が、各々その予測因となった。成人期前期群では、目的変数「他者評価」因子でのみ「親への依存」因子と「反抗期心理」因子が予測因となり、青年期群と成人期前期群では異なるパターンを示した(表7-3)。

外面的で否定的な自己の側面を形成していく要因として、青年期では、親からの影響というより、主として自己決断力の低さなど、むしろ自己の確立度の低さが、外面的で否定的な自己の側面を重視することを促進させていると考えられる。将来に対する不安も、自分自身のために決断が出来ないといった内容を含んでいる。また、「親への依存」も、困ったとき、自信のなさから、結局は親に判断を求めるという「自己決断力」の低さと同様の

意味合いを持っている。重視度との関係も含め考えると、特に社交場面など対人接触場面において、判断力の低さなどの自己の未熟さを他者に気が付かれないようにするため、形成された自己認知の様式と思われる。

(2) 自己の内面的側面

a. 否定的側面について

重視度からは、青年期群・成人期前期群間で得点上差異が見られなかった内面的で否定的な自己の側面(「否定的自己価値」因子)について、青年期群では、「親への服従」因子が有意な説明変数となった。しかし、成人期前期群では、「時間的展望の拡散」因子と「反抗期心理」因子といった、自己確立に関連する因子が有意な説明変数となり、影響を与える要因が異なった(表7-3)。

本調査の結果から、青年期の自己形成において、自己の否定的側面でも、外面的側面では自己確立の問題と関連し、内面的側面では親との関係が影響を与えることが示された。すなわち、青年期段階では、親に服従していることが内面的で否定的な自己の側面を重視することを促す結果となった。このことはまた、self-esteem との関連において、「女子は父からの精神的独立性が高く、父母の心理的圧迫が少ない程自尊感情が高くなる。」という高木・藤田(1988)の結果の裏返しを示すものと考えられる。青年期段階では、親の統制感がまだ強いためか(小野寺、1993)服従してしまうが、それが内面的で否定的な自己の側面を重視することを促進させるきっかけになっていると考えられる。

青年期における自己改革のきっかけとなる自己否定は、内面的な自己の側面において、自己確立に関連する要因に起因するのではなく、親子関係に関連する要因に起因し始まるものと思われる。

b. 肯定的側面について

否定的側面同様、成人期前期群と重視度において差異が見られなかった内面的で肯定的な自己の側面(「肯定的自己価値」因子)について、本調査の結果からは、青年期群において重相関係数は有意であったが、因果関係を示す有意な説明変数は全く見られなかった。しかし、成人期前期群では、重相関係数が有意ではなかったが、説明変数「親への服従」因子において標準偏回帰係数が有意となり、内面的で肯定的な自己の側面の果たす役割が、青年期段階と成人期前期段階では異なることを示した(表7-3)。

研究2,3において「肯定的自己価値」因子について、重視することを回避する傾向があることが示唆されている。独立意識からの影響という観点から検討した本調査の結果からも、青年期段階では、内面的で肯定的な自己の側面を準拠枠として重視することに影響を与える要因が見いだされなかった。しかし、この「肯定的自己価値」因子は、self-esteem の中核的な側面と考えられる。この側面が果たす役割について不明な点が多く残る。今後ともさらなる検討を加えていきたいと考える。

3. まとめ

自己の否定的側面において、外面的側面を重視する要因が、自己確立に関係する要因で、自己の内面的側面を重視する要因が、親子関係に関係する要因であった。すなわち、対人

関係領域の自己の側面を重視することに影響を与えている要因が、内面的な自己確立に係る要因であり、自己洞察や内省によりとらえられる自己の側面を重視することに影響を与えている要因が、対人関係に関わる要因であった。独立意識からみた青年期の自己の構造の特徴は、このような重視する自己の側面と重視することに影響を与えている要因が交差している（ねじれている）ことにある。本研究には、この「ねじれ現象」を説明するだけのデータはないが、この「ねじれ現象」が、女性の自己の構造や発達過程を複雑にする要因となっているものと思われる。

（注1）いったん社会人となり短大・専門学校へ再入学した、いわゆる社会人入学生2名を含めている。

（注2）この因子分析を行った当時の原データは、前述のとおり各因子の寄与率以外、現在残されていない。今回データから各因子の λ^2 を計算した結果、第1因子.704、第2因子.634、第3因子.539、第4因子.236、第5因子.318、第6因子.637であった。第4因子と第5因子の λ^2 の値が非常に低い。留保付きの尺度と考えていただきたい。

<引用文献>

- 遠藤由美 1992 自己認知と自己評価の関係 - 重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 - 教育心理学研究, 40, 157-163.
- Gilligan,C. 1982 In a different voice:Psychological theory and women's development. 岩男寿美子(監訳)1986 もうひとつの声 - 男女の道徳 観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, 64, 147-152.
- 高木秀明・藤田仁美 1988 親子関係と青年の自己意識 - 自我同一性、自尊感情との関連 - 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 360-361
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

研究 8

青年期から成人期前期にかけての
Self-Esteem の発達的变化に関する一研究
- 女子を被験者として、
性格特性からの検討 -

.目的

これまで、self-esteem の自己認知的側面の特徴について検討を加えてきた。本研究では、self-esteem の発達的变化について検討することを目的とする。研究7において、成人期前期段階でも心理発達段階としては、青年期後期の段階であることが示唆された。また、女性の場合 self-esteem は発達的に低下するという指摘もある。成人期前期段階が心理発達の青年期後期の段階であるとするれば、「自己確立」の最終段階でもある。青年期を過ごす中で self-esteem がどのような変化を遂げていくか、性格特性との関連から検討していくことを目的とする。

.方法

1. 調査対象者

研究7と同一の調査対象者である。

2. 測定用具

self-esteem の測定用具として、研究5で使用した10項目からなる Rosenberg Self-Esteem 尺度（以下 RSE）を用いた。

性格特性を測定する用具として、市販されている YG 性格検査を用いた。

RSE は因子分析の結果3因子を抽出しており（三田，2000）、第1因子「自己矮小感」（項目2, 5, 6, 8, 9）第2因子「自負心」（項目3, 4, 7）第3因子「自己肯定感」（項目1, 10）で、5件法により評定を求めた（項目内容については研究5を参照のこと）。なお、第1因子は全て逆転項目であるが、より高得点の方が高 self-esteem となり、より低得点の方が自己矮小感が強いことになる。

. 結果

RSE の各下位因子、合計得点の平均値の t 検定の結果を表8-1に示す。全て青年期 < 成人期前期の有意差・有意傾向が見られた。続いて RSE 各下位因子・合計得点と YG 性格検査の各下位因子との相関値（Spearman の順位相関）の結果を表8-2、8-3に示す。全般的に第2因子「自負心」以外は、青年期群・成人期前期群ともに同様の相関の傾向が見られたが、「自負心」においては青年期群・成人期前期群で異なる相関の傾向を示した。

	群	N	平均	SD	t 値	df	p
矮小感	青	90	13.64	3.93	-1.81	163	+
	成	80	14.70	3.66			
自負心	青	90	9.57	2.22	-1.91	163	+
	成	80	10.18	1.89			
肯定感	青	90	5.63	1.78	-2.93	163	****
	成	80	6.40	1.51			
RSE 合計	青	90	28.84	6.60	-2.58	163	*
	成	80	31.28	5.55			

+ p<.10 * p<.05 * * * * p<.005

・考察

self-esteem は青年期から成人期にかけて向上する結果を示した。従来より指摘されている青年期特有の不安が成人社会へデビューしたことで、特に時間的展望など確立し、不安が解消されていった結果と推測される。青年期群・成人期群ともに「自己矮小感」や「自己肯定感」は多くの YG 性格検査の下位因子と相関した。性格は変化するものと考えられ、このことは性格の変化により「自己矮小感」や「自己肯定感」は同様に変化する可能性を示唆している。しかし、「自負心」は、青年期群では多くの性格特性と相関しているが、成人期前期群では、ほとんどの性格特性と有意な相関関係が見られなかった。YG 性格検査で測定される性格特性は、いわば、現実場面での判断とも考えられる。全般的に self-esteem が向上した結果、「自負心」は内在化し、変化する性格特性に影響を受けなくなってきたことを示唆している結果と考えられる。逆に、青年期では「自負心」も性格の変化に連動してしまい、不安定になってしまう傾向があるように思われる。self-esteem の中核的な要素がこの「自負心」である可能性が推量される。

(注) 表 8 - 1 : 「青」は青年期、「成」は成人期前期群を示す。

<引用文献>

三田英二 2000 女子青年の Self-Esteem と社会態度に関する因子分析的研究 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 13 - 2, 247-260.

	矮小感	自負心	肯定感	RSE 合計
YGD	-.516**	-.249*	-.572**	-.589**
YGC	-.459**	-.290**	-.483**	-.496**
YGI	-.578**	-.448**	-.636**	-.702**
YGN	-.509**	-.232*	-.504**	-.521**
YGO	-.237*	-.124	-.209	-.250*
YGC _o	-.256*	-.174	-.368**	-.320**
YGA _g	-.014	.272*	.107	.134
YGG	.397**	.459**	.590**	.578**
YGR	.137	.061	.204	.200
YGT	.395**	.240*	.317**	.425**
YGA	.333**	.298**	.450**	.446**
YGS	.355**	.363**	.470**	.494**

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

	矮小感	自負心	肯定感	RSE 合計
YGD	-.646**	-.022	-.488**	-.555**
YGC	-.408**	.159	-.359**	-.317**
YGI	-.694**	.023	-.589**	-.600**
YGN	-.580**	.013	-.577**	-.515**
YGO	-.538**	.065	-.318**	-.414**
YGC _o	-.463**	-.027	-.528**	-.425**
YGA _g	-.089	.261*	.086	.031
YGG	.560**	.291*	.475**	.598**
YGR	.131	.064	.299*	.173
YGT	.410**	.043	.310**	.362**
YGA	.415**	.224	.377**	.437**
YGS	.395**	.052	.481**	.398**

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

總括的討論

本稿では、まず、青年期女子の自己の構造と自己認知の特徴について総括的な検討を行う。その上で、成人期前期との比較から得られたデータをもとに、女性の青年期における自己形成について考察を行っていくこととする。

1. 青年期女子の自己の構造

本研究で用いた自己をとらえる4つの側面は、青年期段階では、外面的自己の側面と内面的自己の側面が明確に分化している状態ではなかった。梶田(1988)は、自己の外面的側面と内面的側面は相対的な独立性を持ちながら発達することを指摘しているが、本研究の結果は、外面的側面と内面的側面が分化しているのではなく、肯定的側面と否定的側面とが分化し、しかし、否定的側面が自己全体を占める割合が大きいことを示した。

また、自己の肯定的側面全体では、自己を支えるといった機能は働かないことが示唆された。何故ならば、肯定的で内面的な側面は、理想自己的な目標となってしまう(研究2, 3, 5, 7), 重視することは心理的な圧迫感となり、重視することを回避していることが推測された。そして、肯定的で外面的な側面は、良好な対人関係を維持するという本来的な役割どおりに機能するのではなく、神経質さや攻撃性を他者に気づかれないように、自分を防衛するため、外面的な自己の側面を重視していることが示唆された(研究2)ためである。

高田(1993)^{注1}は、社会的比較過程モデルに基づき、日本人青年(大学生)の自己概念形成を検討している。比較の対象を日本人成人とアメリカ人大学生とし、その結果、日本人青年は、日本人成人と比較において、自己概念の社会的(社交など)あるいは外面的(容貌など)側面が区別されていないと指摘している。また、アメリカ人大学生と比較した場合、日本人大学生は、自己概念の社会的側面と外面的側面で、年齢の類似した他者との社会的比較の頻度が極めて高い結果を示した。そしてこれらをとおして、日本人大学生の特徴として、以下のことを指摘した。自分自身を評価する際、年齢の類似した他者(同輩)との社会的比較を多用する。自己概念の社会的側面と外面的・客観的側面において、その傾向は顕著である。それら側面の自己評価において、個々の側面は区別されず、いわば未分化に同輩との比較という基準が用いられる傾向がある。上記諸点は、相互依存的自己理解が優勢なものに特に著しい。

本研究の結果は、高田(1993)が指摘した内容と類似するものであった。概ね、自己の各側面は区別されず、ある刺激が自己意識全体に影響を及ぼす可能性があることを示唆している。

自己の否定的側面では、自他の相対的な比較が行われるか否かにより、self-esteemの影響の仕方が異なった(研究5)。すなわち、self-esteemが自己認知に影響するのは、自他の相対的な比較がある場合で、比較が行われない場合には、self-esteemは外面的で否定的な自己の側面を重視することへの予測因子とはならなかった。類似他者との社会的比較を多用するという高田(1993)の指摘と一致する。このため、否定的な側面でも、対人関係領域である外面的な側面で、自他の相対的な比較から分化が始まっていくものと思われる。

他者との比較の中から相対的に自己を把握していくため、自己が分化していく過程は、「外面-内面」の軸から分化から始まるのではなく、「肯定-否定」の軸から分化が始まるものと推測される。この結果、青年期女子の自己の構造は、外面的側面と内面的側面が

未分化で、肯定的側面と否定的側面が分化している状態になっていると考えられる。

2. 青年期女子の自己認知の特徴

研究6で示されたように、自由裁量の幅が広いしつけを受けていると、自己の内面性を重視することにもなり、親のしつけの方略も重要な役割を担っていることが推量される。

しかし全般的には、青年期での自己認知の特徴は、外面的で否定的な自己の側面を重視しているものと考えられる。その原因として、相対的に自他を比較し、劣等感が強いこと（研究3）や、自己決断力が低いこと（研究7）などが挙げられる。このことは、他者を強く意識していることを示す結果と考えられる。女性の場合、自我同一性理論は「他者からの分化」ではなく「他者との関係性」からとらえなおすべきと主張した杉村（1998）を支持する結果とも考えられる。

しかし、否定的側面は、自己意識全体を占める割合が大きく、しかも、外面的側面と内面的側面が明確に分化していず、同様に内面的側面も肯定的側面と否定的側面が分化していないことが示唆される（研究2）。このため、外面的で否定的な自己の側面を重視していても、結果的に、外面的で肯定的な自己の側面をも含んだ自己意識全体が、否定的な感情に支配されてしまう可能性をはらんでいる。自己の外面的側面を重視する原因は、自己の内面的な未熟さに起因し（研究7）、他者から批判されたくない、すなわち、外顕する行動に対して他者から“後ろ指をさされたくない”という動機にあると推測される。

内的準拠枠として用いられる自己の側面は、外面的で肯定的な側面でさえ、「神経質」・「攻撃的」と相関関係を持った（研究2）。また、重視する自己の側面と重視することに影響を与える要因に「ねじれ現象」が起きていること（研究7）など、どのように考えればよいのだろうか。

本研究は、このような現象が起こることを直接解釈・説明するだけのデータはない。しかし、推測として以下のことが考えられる。

研究2の相関分析では、外面的で肯定的な自己の側面と有意な相関関係を示した性格特性は、上述のように一見矛盾した性格特性（「神経質」と「攻撃的」）であった。また、研究4においても、性格特性を説明変数とし、目的変数が外面的で否定的な自己の側面を示す因子であったとき、同様に一見矛盾する性格特性（「社会的外向」と「のんき」）が予測因子となった。

外面的な自己の側面は、社交場面など対人関係場面で機能する自己の側面として考えられる（平石，1990）。本研究の結果は、研究7が示したように、対人関係領域である外面的で否定的な自己の側面を重視するのは、自己決断力の低さなど自己の未熟さを他者に気づかれないようにすることが目的となる。いわば、自己の外面的側面は、他者の批判的な評価から自己を守るための機能を担っていると推測される。

否定的側面において、外面的側面と内面的側面が未分化な状態にあるため（研究2）、他者からの批判は、自己の外面的で否定的な自己の側面にとどまらず、前述のように、自己の内面的で否定的な自己の側面に対する批判としても認識されてしまう。その結果、自己意識全体へのダメージは、より強まる結果を招いてしまうことになる。しかし、個人には、self-esteemは維持したい（Tesser, A., 1984）、自己システムの崩壊は避けたい（Epstein, S., 1973）という基本的な欲求があることが指摘されている。このため、自己を

守る機能が必要になる。

このように考えると、一見矛盾する性格特性との関連が示されることは、自己の外面的側面自体に内的準拠枠としての機能があるのではなく、真の内的準拠枠として機能するのは、重視することに影響を与えている要因にあると考えた方が、妥当なものと思われる。そして、自己の外面的側面は、内的準拠枠としてではなく、自分の未熟さが外顯しないように隠すための“壁”としての役割を担っていると推測される。

このような仮定をすれば、研究7での青年期と成人期前期との違いは、自己の未熟さを他者に気付かれないようにするため、この“壁”の中に覆い隠さなければならない自己の未熟さが発達的に質的な変化をした結果、ということになる。

“壁”の中に覆い隠さなければならないものは、他者から“後ろ指をさされ”そんなことになる。そして、“後ろ指をさされない”ようにするため、“後ろ指をさされ”そんなこと解決していかなければならない。“壁”の中に覆い隠すべきは、“解決しなければならない重要なテーマ”ということになる。

青年期段階は、親に依存していることや、自分がどの方向へいくべきなのかよく分からない状態（時間的展望の拡散）にあり、傾倒するべきものもまだ見つからない状態（自己決断力の低さ）にある。いわば、未熟な自己の状態にある。“解決しなければならない重要なテーマ”が、青年期段階では、この「未熟さ」となる。

成人期前期段階では、自己決断力が増し、将来に対する展望が開かれることで、このテーマが解決される。そして、新たなテーマとして、「親への依存」と「反抗期心理」が混在するアンビバレントな感情を残していることが、自分の「未熟さ」（解決しなければならない重要なテーマ）となる。自己の外面的側面は、この“解決しなければならない重要なテーマ”である「未熟さ」を覆い隠すための役割を担っているのではないだろうか。

研究7で示されたように、特に成人期前期群では、外面的で否定的な自己の側面を重視する予測因子として、青年期群で見られるような「自己決断力」は予測因子とはならず、目的変数「他者評価」因子で「親への依存」と「反抗期心理」という相反する感情が有意な説明変数となった。成人期に移行した段階でも、まだアンビバレントな感情が残っている。このことが外顯してしまったとき、他者にどのように評価されるだろうかという不安が、“解決しなければならない重要なテーマ”の解決を促進させる。これが原動力となり、自立や同一性達成に向かうのかもしれない。

成人期前期群では、それ以外の目的変数において、有意な説明変数は見られず、重視される自己の側面は、説明変数から影響を受けなくなっている。すなわち、覆い隠さなければならない「自己の未熟さ」が減少してきていることを示す。

このように自己の外面的側面は、自己の未熟さを覆い隠すために“壁”としての機能を担っているという仮説は、それほど的外れな仮説ではないものと思われる。

結局、青年期女子の自己認知の特徴は、二重構造となっていることにあると思われる。一見、外面的で否定的な自己の側面を内的準拠枠として用いているように見えるが、真の内的準拠枠は、“壁”の中に隠された自己確立に関わることにある。このような「ねじれ現象」が、女性の自己の構造や発達過程を複雑にしているひとつの要因になっているものと考えられる。

3．女性の青年期での自己形成について

“壁”の中での成熟を待ってから肯定的側面での成熟が始まる，すなわち，自己の否定的側面と肯定的側面の成熟に時間差が生じている。このことが，女性の自己形成の過程を複雑にする，また別の要因となっていると思われる。

青年期段階で，「肯定的自己価値」因子は，YG 性格検査と MPI の各下位因子と有意な相関は見られなかった（研究 3）。研究 2、3 からは，内面的で肯定的な自己の側面は，理想自己的な目標となってしまう，かえってそのことが心理的圧迫感となり，心理的安定感や適応感を維持するためには，重視すること回避していることが示唆されている。同様に，研究 7 の結果からも，青年期段階では，やはり重視することに影響を与えている要因は見いだされなかった。研究 7 で示されたように，青年期群では，「肯定的自己価値」因子に因果関係を示す有意な説明変数は見られなかった。

成人期前期段階に移行し，初めて自己の肯定的側面を重視することと関連する要因が見いだされた。しかしそれは，自信の欠如から親に服従してしまうことが「肯定的自己価値」を重視する要因になるという結果であった。

「肯定的自己価値」因子の重視度の変化は見られなかった（表 7 - 2）が，重視することに影響を与える要因は変化していることが考えられる（表 7 - 3）。

外面的で否定的な自己の側面の重視度は，青年期から成人期前期にかけて減少し，「自己決断力」は向上している（表 7 - 2）。そして，self-esteem も向上している（表 8 - 1）。研究 8 で示されたように，self-esteem と性格特性は，青年期群と成人期前期群とでは異なる相関関係を示している（表 8 - 2，表 8 - 3）。青年期段階では，RSE の 3 つの下位因子とも多くの性格特性との有意な相関関係を持つが，成人期前期段階では，RSE の下位因子「自負心」で，YG 性格検査の下位因子とほとんど有意な相関関係を示していない。これは，self-esteem の向上に伴い（表 8 - 1），自己決断力が増し（表 7 - 2），他者からの評価などがあまり気にならなくなり（表 7 - 2），他者からどのように指摘されようが，「自分にはこのような才能・長所がある」といった自負心が内在化した結果（研究 8）と考えられる。このため，性格特性と関係を持たない自負心が成立していったものと考えられる。

自己の否定的側面では，自己決断力が増し，self-esteem が向上し，自負心が内在化したところで，「ねじれ現象」は解消する。すなわち，自己の外面的側面を重視することに影響を与える要因は，対人関係を意味する要因となり，内面的側面を重視する要因は，自己確立などを意味する要因となる（研究 7）。その時点で，自己の否定的側面が確立するのではないだろうか。自己の否定的側面を受容した段階で，肯定的側面での成熟のプロセスへの端緒につくものと思われる。

しかし，肯定的側面では，成人期前期段階（心理発達の的には青年期後期段階と思われるが・・・）で，内面的で肯定的な自己の側面に影響を与える要因が，「親への服従」といった対他者関係を示す要因であった（研究 7）。ここでも「ねじれ現象」を起こしている。この「ねじれ現象」は，自己の各側面が成熟していくときの特徴であるかもしれない。本研究のデータにはないが，肯定的側面においても，更なる self-esteem の向上などにより，本来の意味で，自己確立が完成したときに，この「ねじれ現象」が解消していくものと思われる。

ただ、このことについて、独立意識尺度の作成者である加藤・高木(1980)が「女子の場合、親への依存性が中学生よりも高校生、大学生の方が高くなっており、女子においては親への依存性が必ずしも独立への障害にはならないことを示している。」と指摘している。

さらに、西平(1990)は、青年期の心理的離乳に関して、従来から指摘されている思春期の心理的離乳を「第1次心理的離乳」とし、青年期後期に「第2次心理的離乳」の時期が訪れるとしている。前者は「親からの離脱、依存性の払拭に重点をおくもの」であるのに対し、後者は「離乳後に育つべき自律性に重点を移したもの」(p.45)とし、「この第2次心理的離乳は、第1次の諸特質を引き続きながら、次第に自立、独立の方向に重点を移し、より客観的、自覚的になり、一対一の間人関係として両親との絆を再び強めさえする。」(p.50)と述べている。しかし、「青年期中期に入ってしばらくはこの第1次心理的離乳が続くが…(中略)…多くは次第に質的に変容しながら、不徹底だった心理的離乳を押し進め」、「両親の欠点や短所には厳しい批判を浴びせるが、同時に両親の生育史や現在の環境などにも目を注ぎ、同情や共感もできるようになる。…(中略)…しかし、外面的にはなおかなり激しい反発や離反がつづき、…(中略)…青年後期の第2次心理的離乳は、行動はますます独立し離反するものの、内面的にはより親和的、建設的になり、本格的な主体性の主張を始める。」(pp.50-51)と青年期の親からの自立の過程を示している。

また、女子青年の親子関係について、浴野(1994)は、ブロス(Bloss,P.)の「第2の分離・個体化」を紹介する中で、「18から22歳の「個体化期」になると…(中略)…心理的な離乳もかなり進み、親への嫌悪感や否定感へのこだわりも薄れて、肯定的な評価へと変化してくる。」(p.122)としているが、青年期における心理的離乳については、男子より女子の方が難しく、アンビバレントな葛藤が強く、その解決は容易ではないことを指摘している。

青年期段階においては、西平(1990)や浴野(1994)が指摘するように、親からの離反・反発に重点が置かれている。その離反・反発の対象である親に服従してしまうことが否定的感情に結びついているものと考えられる。しかし、成人期前期段階に移行すると、親に服従することが自己肯定感を支える結果となった。「…アンビバレントな葛藤…」(浴野,1994)は、青年期段階で否定的感情を引き起こす原因となった「親への服従」が、成人期段階(心理発達的には青年期後期段階と思われるが…)では、自己の肯定感を支えているために起こっているのではないだろうか。ただ、研究7において、親子関係に関する独立意識尺度の下位因子の得点には、青年期群・成人期前期群間に差異はない。表面上、親子関係に変化がないことを示している。このため、この「親への服従」は、服従しているのではなく、「…内面的にはより親和的…」(西平,1990),「…親への嫌悪感や否定感へのこだわりも薄れて、肯定的な評価へと変化してくる。」(浴野,1994)ようになり、親と同一化、あるいは親に同一視するのではないだろうか。その結果、傾倒すべきものを見つけ当て、自己確立や自我同一性を獲得していこうとする姿を示しているのではないだろうか。

結局、女性の青年期での自己形成は、他者から分離することなく、自己確立を目指すところにその特徴があると思われる。

青年期での自己形成は、相対的に自己を把握することで、「外面-内面」の軸よりも「肯

定 - 否定」の軸から分化が始まる。そして、自己の否定的側面の受容・確立を目指し歩み始める。このため、青年期をとおり、自己の否定的側面が自己形成に重要な役割をはたす。しかし、内的準拠軸は、自己の外面的で否定的な側面にあるのではない。対人関係領域である外面的側面は、自己の内面的な未熟さを覆い隠すための“壁”としての役割を演じる。その“壁”は、自己に対する否定的な評価を受けたときに、それが自己意識全体に影響し、直線的に自己否定につながらないようにするための役割を担っている。“壁”の中の自己が成熟するまで、自己の未熟さを隠す“壁”としての役割は終わらない。

「ねじれ現象」は、自己の否定的な側面だけにとどまらない。研究7で見られたような成人期前期段階で、「肯定的自己価値」因子の予測因子となったのは、「親への服従」因子であった。ただ、自己の分化は「肯定 - 否定」の軸から始まるといっても、そこには時間差が生じている。自己の否定的側面が、自分自身で納得いくように受容されてから、肯定的側面での課題を解決していくと推測される。

ところで、self-esteem には2つの源泉があると考えられている。White, R.W. (1963/1985) が Silverberg (1952) の説として引用したように、「生涯を通じて自尊心はこれら2つの源泉をもっている。すなわち、一つは内的源泉であり、その人自身の攻撃の効果の度合いである。もう一つは外的源泉であり、その人自身についての他者の意見である。両者とも重要であるが、前者（内的源泉）はより確固たるものであり、一層信頼できるものである。後者（外的源泉）は普通かなり不確実である。自尊心が適切な内的源泉を欠くと、そのためにほとんどすべて外的な源泉に依存しなければならなくなるもので、その人は不幸で不安定である・・・」(p.178-179)。

自己の未熟さ（内的源泉を欠いている状態）があり、そのことを他者に気づかれてしまうことに対する不安感から、対人関係に注意を払った結果、「ねじれ現象」が起きてしまう。しかし、自己の未熟さを隠すためだけでなく、内的源泉を欠いている状態は、外的源泉である他者が必要になる。そのため、対人関係は重要なものになってくる。外面的な自己の側面を重視するのは、このような理由もあるのかもしれない。

4. 残された課題

第1点として、自己に関する質問内容に「あてはまる」か否かの回答形式と「重要である」か否かの回答形式で求められた結果の違いについて、実証的な検討が更に必要なものと思われる。すなわち、「自己概念」の測定と「self-esteem の自己認知的側面」の測定との違いについて、明確な検討を行うことである。

第2点として、本研究では、男性との比較を行っていない。「ねじれ現象」が起こることは、女性の自己形成上だけの問題であるか否かについて更なる検討を行う必要がある。

注1...高田(1993)の研究は、性差については強く言及はしていないが、社会的比較の頻度は男子学生の方が女子学生よりも多かったことを述べている。

<引用文献>

浴野雅子 1994 女子青年の親子関係 岡本祐子・松下美知子(編)女性のためのライフサイクル心理学 福村出版 118-131

- Epstein, S. 1973 The self-concept revisited, or a theory of a theory. *American Psychologist*, **28**, 404-416.
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造 - 自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康 教育心理学研究, **38**, 320-329 .
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 (第2版) 東京大学出版
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, **28**, 336-340.
- 小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究, **64**, 147-152.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論 実証的心理学のパラダイム 金子書房
- 西平直喜 1990 シリーズ人間発達4 成人になること - 生育史心理学から - 東京大学出版
- Silverberg,W.V. 1952 *Childhood experience and personal distiny*. New York:Springer.
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**, 45-55.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較 - 日本人大学生にみられる特徴 - 教育心理学研究, **41**, 339-348 .
- Tesser,A.(1984)Self-evaluation maintenance model process:Implications for relationships and for development. In J.C.Masters & K.Yarkin-Levin(Eds), *Boundary areas in social and developmental psychology*. Academic Press. Pp271-299
- White,R.S. 1963 *Ego and Reality in Psychoanalytic Theory*. 中園正身 (訳) 1985 自我のエネルギー 新曜社

(2005年3月22日 受理)